
ブロリーが幻想入りです・・・はい

スカイワッフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブロリーが幻想入りです・・・はい

【Nコード】

N7154W

【作者名】

スカイワッフル

【あらすじ】

伝説の超サイヤ人ブロリー。

悲しみや怒りなどの感情を破壊でしか表現できなかった男。

制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこう呼ばれた悪魔と。そしてある日悪魔は太陽に突っ込み、死亡する。

そして彼はあの世へ――

だがしかし！彼がいったあの世は『幻想郷』のあの世！

彼はその閻魔に『転生』を命じられ、幻想郷で第二の人生を過ごすことに――

ブローリーの幻想入り小説です。

ほとんどギャグ、たまにシリアス入れる予定です。この小説のブローリーは紳士的です。多分。さらにあまり伝説の超サイヤ人にはなりません。いわゆる奥の手扱いです。

これらの要素が苦手なお方は、戻って帰れるとイイナア。

・・・はい

悪魔への裁き（前書き）

ブロリー「ブロリーです。今回は俺が幻想入りです」

悪魔への裁き

あるところに、最強という名にふさわしい悲しみの戦士がいた。彼はある星の王国で生まれる。

生まれた彼の戦闘力が以上にまで高く、王は自分の邪魔になりかねないと見なす。

もちろん、父親は反対し王に助けてもらおうよう頼み込んだが

しかし――

「お前の一緒に死ねッ！」

父親は息子もろとも討ち捨てられた。

しかし、不幸中の幸い、だろうか

その星の爆発時、息子の潜在能力が発揮。

まだ幼く喋れないという子供だというのに、父親も匿うバリアーで、空気のない宇宙でも活動する事ができた。

その後、息子はすすくと成長した――恐ろしいパワーを付けて。

そして――何年もの歳月が過ぎ――

彼は、父親も目的も何もかも、失ったのだ……

*

死んだ。

悲しみの戦士であり伝説のサイヤ人、ブロリーはそう悟った。死んだ筈だった。しかし、意識がある。

しかしさっきまで『伝説のサイヤ人』の状態だったが、今は通常のサイヤ人の姿になっていた。

そして自分は草原に倒れてる。そして傍に川があった。何故？そんな疑問が頭に浮かぶ。

—— いや、そんな疑問はどうでもよかった。

彼の頭に浮かんだ事は、それだけではなかった。

いや、死んだという事実よりも、重い真実が浮かんだから。

「カアカロットオ・・・ッ」

そう、宿敵がない。

彼には宿敵がいた。しかし、自分は死んでいる。

ゆえに、闘うどころか会えることすらままならない。悔しさが募った。

スッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かが目の前に現れた。

ブロリーはボケた様にポカーンとしてたが、

「・・・・・・・・・・・・・・・・へあっ!？」

驚き、目を見開いた。

ようやくそれが生き物だという事に気がつく。

その者は、女性だった。赤身の髪を持ち、両側に分けて結んでいた。そして最大の特徴として、鎌を持っている。

彼女は疑問気な目でこちらを見ていた。

しかしどちらかと言うとブロリーが疑問気だった。

「あんた、何驚いてんのさ。と言うか、あんた幻想郷の住民じゃないね」

幻想郷？

ブロリーは頭が混乱する。

死んだ。けど、生きている。

しかも次は人と合い、さらには意味不明な単語を聞かされる。

そんな理解不能な表情のブロリーに、彼女は追い打ちをかける様に話かけてくる。

「まあいいさ。さあ、船にのりなよ」

笑顔で言い、川の方角を親指で指差す。

そこには川に浮かぶ、少しボロイ船があった。

ブロリーはもうどうしたらいいのか解らない。

寝ころんだまま混乱するブロリーに、彼女は「もう」と不機嫌そうな声をだす。

「そら、筋肉好青年さん！早くしなよ！」

「ぶ、ブロリーです…」

*

なんか強引に船に乗らされた。

強引過ぎて、一瞬『超サイヤ人』になる所だった。

しかし、なんだか…頭の整理がつかなかった。

そのせいで超サイヤ人になる事すらできなかった。

それより、自分以外にも船に乗せられた者も数人いた。

皆普通の人間に近い気が感じられた。少し違うが人間にもっとも近い。

しかし、彼女は違う。なんだか人間とは違う『何か』が感じられた。

『気』ではないが、『力がある』と言う事は解った。

しかし、自分には及ばないのも確かだと感じる。

「ん？なんだい、何か言いたそうな表情だけど？」

「…いや…なんでも」

短く答える。

彼女はおかしな者を見る様な顔になる。

「あんだ、本当に口数すくないねえ」

「………」

ブロリーは黙りこむ。

何も返す言葉が考えつかなかったからだ。

彼女はフウ、と息を吐いた。

「ほんと、変な奴」

＊

なんか雰囲気身を任せていたブロリー。しかし、なんだか変な所に来てしまった。

そこは地球という裁判所の様な場所。

自分が大きな部屋の中心にいて、その前に少し立派な椅子とテーブルに座った豪そうな人物がいた。

偉そうでも、少女だ。

何やら小さい板を持っている。

「では、裁きを始めます」

裁き！？

ブロリーは驚く。

そして『裁き』という言葉に、何かをされると悟った。

バシユウウンツ

ブロリーの髪が金色になり逆立った。

さっきまで黒かった目が、緑色の眼光を放っていた。

そう、彼は『超サイヤ人』になったのだ。

その気になれば『伝説の超サイヤ人』になれるが、まずは様子を見る事にする。

対する少女は少し反応し、ため息を吐いた。

「はあ、あっちも余計な手違いをしてくれましたね…。おかげで苦
勞しそうです…」

なんだか皮肉を言っていた。
ブロリーにはイマイチ理解できない。
だからまず聞く事にした。

「お前に聞きたい事がある」

さっきまで静かだったブロリーだが、超サイヤ人になる事で性格も
変わり、口調も変わった。

「なんででしょうか？裁判中に私語は謹んでもらいていんですが」

「ここは何だ。そしてこれから何をするんだあ？」

「裁判ですよ。これから貴方の罪の重さを調べるんですよ」

彼は目を細めるが、すぐに笑う。

「はっはっはっはッ！この俺を裁けると思っているのか？」

「はあ、もういいですか？裁判に戻りたいんです」

「いいだろう。聞いてやる」

少女はため息をついたが、真面目な表情になり、口を開く。

「貴方は激しく者を憎みすぎている。」

貴方の死因は異常な執着心とも言っている。その執着心が貴方を滅ぼした。

さらに貴方はある星を一つ破壊している」

「言いたい事はそれだけか？」

「いいえ」

—— 貴方は、誰にも理解されずに生きてきました」

ッ！

ブロリーは目を細め、驚いた様な表情を浮かべた。

彼女の言葉には、説得力があった。

いや、彼女の言った事は事実。

ブロリーは確かに、誰にも理解されなかった。

それどころか、父親には利用される始末だった。

そして彼は憎しみで全てを破壊して

「貴方は実に驚異的な力を持っていた。

その力ゆえ、親ともども討ち捨てられた。

さらにその力を利用され――ある銀河を破壊し尽くした。

理解者がいない、そんな孤独な日々を過ごし、本当の仲間がいな
い。

歪んだ執着心もそのせいでしょう。

貴方は本当は良い人格の筈です。しかし、運命が悪の道へと誘い
込んだ」

ブロリーは思いつめた様な表情になる。

どこか、寂しげでもあり、喜劇な表情でもあった。

「……」

「同族には殺されかけ親にさえも見捨てられた。貴方はそんな悲し
みや怒りなどの感情を破壊でしか表現でき なかった。

制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこ
う呼ばれた悪魔と。

貴方は哀れな人物です。それも、自分ではどうにもできない。

しかし貴方の存在は悪ではなかったとは言えない。

「……」

気づけば、ブロリーの姿は普通の『サイヤ人』に戻っていた。

その思いつめた表情に、少女は同情するような表情を向けた。

「さて、これは裁判が難しい所ですが、白黒はつきりつけさせても
らいますよ」

彼女は、数秒間目をつぶった。

静かに、何かを悟る様に、そして感じ取るように
そして――

「裁判の結果は『転生』です。執着心を捨て、もう一度『本当の貴方』として生きるのです」

ブロリーは、今何が起きているのかよく解らない。

ただ彼女の言葉を聞いているだけだった。

悟ろうにも彼の頭脳では無理だった。

意味が解らない。だが、一つだけ理解できた事はあった。

自分を認めてくれる者もいるんだな・・・と、

ふと、一瞬笑ってしまった。

今までにないくらいに、純粹に。

悪魔への裁き（後書き）

閻魔さん 「では、貴方は幻想郷で暮らしてもらいます」
ブロリー 「はい・・・」

閻魔さん 「・・・あの、理解できてますか？」
ブロリー 「幻想郷ってなんだあ？」

閻魔さん 「それは次回のお楽しみですよ」
ブロリー 「がっかりです・・・」

いざ幻想郷へ やる気のない伝説（前書き）

ブロリー「ブロリーです。ついに幻想入りです」

いざ幻想郷へ やる気のない伝説

ブロリーは死んだ。

しかし、ブロリーは何故か『幻想郷での裁判』を受ける事となる。

どうやら、あの世での手違いがあったらしく、幻想郷に来てしまっていた。

そして、そして幻想郷の閻魔に裁判された。

当の閻魔様は手違いでせいで、厄介の者が来た。と嫌み言っていたが、見事裁判に成功。

結果は『転生』である。

当のブロリーは、何が何だか理解はできなかったが、少し安心した気分になった。

＊

「・・・・・・・・・・」

ブロリーは、幻想郷の閻魔に『転生』を命じられたブロリー。なんやかんやで空気に身を任せた結果、幻想郷という地に行くように言われた。

あまり詳しい説明はされなかった。

だが説明されたとして、ブロリーに理解する事はできぬう！しかし、彼はあまりそう言う事などどうでも良かった。

ちなみに、だが現在、普段のサイヤ人状態だ。

彼は幻想郷の東の端の端に位置する『博麗神社』に居た。と言うより、強制的にここへ移動させられた。

「どこだぁ・・・ここ」

そう呟く。

静かで低い声だった。

そして彼は気がついた。

「・・・・・・・・」

神社の階段から見た光景は、安らぎその物だった。
壮大な自然が広がっていた。一面、まるで理想郷。多すぎない建物
に数多い自然。

しばらく、彼はそんな光景ひ浸っていたが――

「・・・・・・・・へぁッ!？」

自分の真後ろに何者かの気配が感じられた。
それはサイヤ人としての能力が働いたからだ。
彼は一瞬で後を向いた。
そこには――

「うわっ!いきなり大声出さないでほしいぜ!」

「・・・・・・・・だ、誰だぁ・・・?」

金髪で魔法使いみたいな格好をした少女がいた。
ブロリーは逆に戸惑った。

「おっと、他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀だぜ」

「・・・ブロリーです・・・」

「私は霧雨魔理沙だぜ」

「・・・・・・」

「黙るなよ、反応に困るだろ？」

少女「魔理沙は少し戸惑う。

魔理沙はまあいいや、と呟くところ続ける。

「何で神社に来てるんだ？・・・見た感じ、お前は外来人らしいな。見ない顔だし。」

彼女が言うには、この地にとっては外来人らしい。

いわゆる、外から来た人。

ブロリーは身長2メートル以上ある。そして体格は筋肉質であり、しなやかな長い手足をしている。

顔も良い。イケメンだ。

こう言うレベルはまだ人間と呼べるだろう。

しかし、彼は人間ではない。サイヤ人だ。

そして彼はそのサイヤ人の中でも最強クラスのサイヤ人。

まあ、そんな事は見ただけでは魔理沙は理解できないだろう。

「・・・外来人・・・ってなんだあ？」

魔理沙はあく、と面倒臭そうな声を出す。

「そういう事は霊夢に聞くといいぜ」

「……………霊夢って誰だあ」

「この神社の巫女だぜ」

魔理沙がそう言った瞬間、神社の庭から誰かが出てきた。
魔理沙はそっちを向き、少し笑った。

「噂をすればなんとやら、ってこの事か？」

そう、庭から出てきたのは博麗の巫女、博麗霊夢だった。

霊夢はブロリーを見るなりこう言う。

「あんたがブロリーね。閻魔から聞いてるわ。まず神社に入ってくるかしら？」

霊夢がブロリーに向かって手招きをする。

「……………」

黙ってついていった。

＊

博麗神社の座敷だ。
それぞれ霊夢とブロリー＋魔理沙

が居る。

「……魔理沙がいる事にはつつこまないとして、ブロリー。あんたには幻想郷に置いて知ってもらおう事が山ほどあるわ」

「……………」

—少女説明中—

「というわけだぁ！」

「親父イが黙る意思を見せなければ、このPODを破壊し尽くすだけだぁ」

「やめろブロリー！落ち着けえ！」

「とっておきだぁ……ッ」

デデーン

「これが本編だと思っているのか？」

＊

霊夢の説明が終わった。

彼女はブロリーに、幻想郷の事、人外である種族、スペルカードなどについて話した。

「……………」

「あんた……本当に理解してるの？」

「・・・はい」

彼女の説明が上手かったのか、ブローリーは理解できた様だ。と、言うより。普通なら驚いたりするのが上等の反応だ。

しかし、ブローリーは理解しても、そんな事はどうでもいい話だった。何せ、目的がないのだから。生きていくという事さえも目的の内に入っていない。今は――

「驚いたりするのが上等の反応な反応だぜ？」

魔理沙が言うが、

「・・・俺には、そんな事はどうでもいいことだ・・・」

いつもの低く大人しい声で言う。

霊夢と魔理沙は何かを言いたそうな顔になったが、その表情は呆れたようになりため息をついた。

「まあ、たまにはこういう反応の人もあるのね」

「なんか、落ち着き過ぎじゃないか？」

「・・・そんな事ない・・・。それより、出てっぺいいかあ・・・？」

「え？、ええ。まあ、説明する事は全部説明したし・・・」

「じゃあな」

そう言ういい、神社の庭へと出ると――ズキュウウウン！

そのまま宙に浮き、かなりのスピードで何処かへと飛んで言った。

それを見ていた霊夢と魔理沙は――

「・・・あれ？あいつ外来人じゃなかったけ？」

「さ、さぁ・・・。と言うより、あいつって人間なの？外の世界には浮遊できる人間なんて一握りもない筈だけど・・・。」

驚愕していた。

いざ幻想郷へ やる気のない伝説（後書き）

ブロリー「ブロ（ry）今回はゲストの霊夢と魔理沙がいます…」

霊夢 「博麗霊夢よ」

魔理沙 「魔理沙だZE☆」

ブロリー「二人は仲がいいのかあ…？」

霊夢 「良い分類なんじゃない？」

魔理沙 「ああ、いつもお茶を飲ませてもらってるぜ」

霊夢 「お賽銭を置いていってほしいわね」

ブロリー「とっておきだあ…．．．はい、？円です…」

霊夢 「できればもっと…．．．って何この緑怪人！？」

？ 「ふん、化け物め。好きにしろ」

ブロリー「また一匹虫けらが死にに來たか」伝説化！

？ 「10円！」

ドカ、ダッダッダッダッダ

？ 「クソマア！」バキィッ

ブロリー「…おもしろくないです」シュウウウ↑戻りーです

霊夢 「いや、あんたが勝手に出して飛ばしたんでしょ…」

魔理沙 「でも凄い戦闘だったぜ！瞬殺だったし」

ブロリー「もっと褒めてほしいなあ…」テレっ

紅い館 戦って和解 紳士のブローリー（前書き）

ブローリー「ブローリーです。紅い館に入ります」

紅い館 戦って和解 紳士のブロリー

「・・・・・・・・やることも・・・・・・・・何もない・・・・・・・・」

ブロリーは――― 適当に空を飛んでいた。

彼は本当にやる事がない。宿敵がいない――― それだけで、気力が失せる。

グウウウウ・・・・・・・・

「・・・・・・・・！」

と、そんな空気を壊すかの如く、腹が鳴る。

ブロリーは一瞬強張った顔になった。そして思う事はただ一つ。

「・・・・・・・・ご飯・・・・・・・・ですかあ・・・・・・・・」

＊

ブロリーは食糧を探し求め、幻想郷を飛びまわる。

そして―――

「・・・・・・・・紅い、館か・・・・・・・・」

ブロリーは、大きな湖の近くにある紅い館を見つける。
ブロリーはこう考えた。

豪華そうな館Ⅱ大量の財産Ⅱ大量の食糧

「・・・・・・・・ふふ」

いつも無表情な彼だが、ほんの少し、笑った。

*

「・・・・・・・・」

「あ、あの、どちら様で？」

紅い館の門まで来たのだが、誰か居た。

「他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀・・・・・・・・だ」

と、ついさっき会った魔理沙の言葉を適当に生かした。

「あ、しつれいしました！私は紅美鈴と言います！」

紅美鈴——この館の門番をしている妖怪だ。

「・・・・・・・・ブロリーです」

「ブロリーさんですね。解りました。それで・・・・・・・・何か様ですか
ブロリーさん」

「ご飯を食べたいです・・・・・・・・」

・・・え？

美鈴は一瞬、固まる。

紅魔館は基本的に関係者以外立ち入り禁止だ。その上、紅魔館に入ろうとする者自体あまりいない。

第一、入ろうとすると自らが迎え撃ち、中に入ればただでは済まないだろう。

しかし、彼は『ご飯を食べたい』というかなり異質な理由で入ろうとしている。

怖いもの知らず——いや、もしかしたらここの事を知らないのだろうか

「すみませんが・・・関係者以外立ち入り禁止なんです。お引き取りください」

「・・・なにい！」

いきなり、さっきまで無表情で大人しい彼の表情が、強張った顔になったが、すぐに元に戻る。

かと思っただけなんだか悲しそうな顔になった。

「えーと、とにかく無理です」

「・・・俺は腹が減りました・・・」

「ええええ・・・」

「・・・強行突破します」

ブロリーはそのまま、紅美鈴を無視してスタスタと涼しげに門をく

ぐりぬけようとする。

「そんなこといったって……ってちよつとおおお!? 人の話聞いてました!?」

「俺が……素直に聞くと……思っ、いたのか……?」

無視してスタスタと歩く。

(し、仕方がないですね……。ここは力づくで止めさせてもらいますよ! 見た目はかなり体格がいいですが……恐らく人間でしょう。楽勝です!)

彼女は、ブロリーの後ろで身を構え……

「はあああ!」

ブロリーに向かって拳を放った。

ドゴォッ

見事、ブロリーの背中を捕らえた。

妖怪である紅美鈴……力が人間よりも遥かに強い。たとえそれがどんなに力持ちの人間でもだ。

そのままブロリーに拳があたり、ブロリーは吹き飛ばされるだろう

—— 彼が人間なら

「……ッ!」

ブロリーはビクともしない。

吹き飛ぶどころか、数センチも揺らいでいない。

即ち、サイヤ人の中でも最強クラスのブロリーにとっては妖怪の怪力などどうってことない。

ブロリーは数秒間止まるが、後を振り返った。

「なんなんだぁ・・・今のは・・・」

静かで低い声で言う。

何事も無かったように、無表情な顔だった。

「・・・ッ！」

彼女は反射的に振り返ったブロリーの顔面に2回目の拳を放つが

ガシッ！

彼女より素早く、拳を手のひらで受け止める。

「・・・そ、そんな・・・。貴方・・・人間じゃない・・・。化物ですか！」

美鈴は、驚愕の表情でブロリーを見る。
ブロリーは相変わらず無表情。

「・・・俺が化物・・・？・・・違う・・・俺は悪魔だ・・・」

そう静かに吐き捨て、受け止めた美鈴の拳を離してあげた。

そして、何事も無かったかのように館の中へと入って言った。

「え？・・・あ、あの」

「・・・・・・・・・・」

反撃されなかった事が余程以外だったのか、思わず呼び止める。
それに応じたのかブロリーは立ち止まり、再度振り返る。
そして・・・

にこ

柔らかい笑顔を向けた

「え！？」

＊

ブロリーは門をぐりぬけ、館の扉をあける。

そしてブロリーの視界の飛び込んだのは、豪華な内装と驚いた妖精
メイド達の顔だった。

メイド達が驚くのも無理も無い。

いきなり身長2メートル越しの長身男が入ってきたのだから。

「ブロリーです・・・・。何か食べさせてください・・・・」

と、無表情で言った。

だがしかし、メイド達は驚愕しており、動く気配もない。
中には作業中で止まっている者もいた。

「…………無視ですかぁ…………ふふっ」

と、笑った瞬間、何かギラギラと光る者が真っ直ぐに向かってくる。

「…………へあッ！」

驚いた声なのか掛け声か解らないが、張りの良い声を出した。
それと同時に飛んできた物を回し蹴りで蹴り飛ばす。

ブロリーはわずかに強張った表情となり、バチッ、と彼の周りに緑の光が散らされた。

ブロリーは蹴り飛ばされ、地面に落下した粉々な物を見た。

彼の蹴りでバラバラに碎けていたが、ナイフだと理解できた。

彼はナイフが飛んできた方向を見る。

「ッ」

誰も居なかった。

だが——妖精メイド達とは違う気配をある方向から感じた。

彼はそちらを睨めつける。

そこには、少女がいた。

白髪で目が紅い——メイドの様な格好をした少女。

「私のナイフを砕くなんて、かなりの実力者の様ね。私は十六夜咲夜。この館のメイド長よ」

「ブロリー・・・だ」

さっきとは違う、キツイ表情で言った。

「貴方達、ここは私に任せて、さっさと仕事を続行させなさい」

咲夜は、まわりでアタフタしていたメイド達にそう仕向ける。

メイド達は理解した。本当の意味は『ここから離れなさい』という事を。

メイド達は慌てて何処かへと行ってしまふ。

「で、門番まで破って、何のようかしら？早く用事を済ませたいんだけど」

「お腹が減りました」

少し表情を和らげて優しく言ったが、すぐにキツイ表情になった。それを見た彼女は

「あら、随分と移り変わりが早いのね」

「……」

「まあいいわ。今決めなさい。ここで今日の晩御飯になるか、さっさと立ち去るか・・・」

「・・・腹を満たすまで、俺は帰る事が・・・できぬう！」

「・・・それが貴方の答えね・・・じゃあ」

死になさい

そう聞こえた瞬間、咲夜は消える。

それと同時に、全方向からナイフが襲い掛かってきた。

「ッ！——ウオオオオオオオ！」

そう咆哮を上げた瞬間、彼の体から緑色のオーラの様なものが放射線状に全方位へ散らされる。

衝撃派の様な物が巻き起こり、ナイフは吹き飛ばされてしまった。

「ッ——やるわね」

咲夜はそう言う。

「……俺もほんの少し本気を出そうか……」

「……あら？本気を出さなくて大丈夫かのかしら？」

彼女はそう言うが、実際には内心驚いていた。

あれだけの身のこなし、判断力、力。それでも本気ではない、ということに

そんな彼女を無視し、ブロリーは戦いに全力ではないが力を入れる事にする。

「……ッ！」

ブロリーの顔がさらに強張った。

そして体全体に力を入れ――

「――う、ああああアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「――ッ！」

その瞬間、そこら一帯のガラスやカーテンなどが破損する。

そう、衝撃が走ったのだ。

さっきよりも強烈は緑の光が辺りを照らし、破壊した。

そして――ブロリーの姿に変化が見られた。

髪が金色に光、逆立った。眼光も緑に発光する。

オーラが溢れだしていた。

今の彼の姿は『超サイヤ人』 さっきよりも一段とパワーアップした姿だ。

「フフフ……ハッハッハッ、アアアアアアアッハッハッハッハ
！」

さっきとはまるで違う。静かな彼とは違く、堂々と、高々に笑う。
まるで別人の様だった。

「お前、咲夜と言ったな。まずお前からねじ伏せてやる」

咲夜は感じ取った。明らかに違う。

何かか理解できないが、自分の身に圧迫感を覚えた。

ピリピリとした――何かを感じ取った。

「喰らいなさいッ！」

彼女は少し焦った。

そして時を止め――ブロリーに向かって無数とも行っている程のナイフを投げつけ――時を動かす。

ブロリーは突然現れた無数のナイフを見るが、ニヤリ、と笑って見せる。

彼の体を丸く覆う様に緑の光が出現する。

ガキイツ

その光に当たったナイフは砕け散った。

咲夜は一瞬で悟った。

「バ、バリア……ッ！」

「……デエヤア！」

ギユンッ

ブロリーは地面を蹴ったかと思うと、物凄い速さで飛行しながら拳を突き出し突進してきた。

咲夜は急いで時を止め、避ける。そして時を動かす――

ゴシヤアアッ！

ブロリーの拳は、館の壁をすんなり破壊してしまう。

「す、すごいわね……」

ブロリーは外した、と悟ると咲夜を睨めつけた。

「貴方・・・手加減って物をしらないの!？」

ブロリーは手加減?とオウム返しをすると、高々と笑う。

「手加減はしてる。お前は本気を出す者にあたいたくないのだ!」

咲夜は背筋に凍りつく様な感触を覚えた。

このまま戦っても体力を消耗するだけ。次で決めようと。

シュンッ!

咲夜は時を止め、ブロリーの背後に移動する。

そして時を動かし

「これで、終わりよ!」

時を動かし始めたギリギリの時間でブロリーにナイフを逆手で突き刺す。

彼女はブロリーはナイフをバリアや衝撃派、攻撃などで防いでいた。だからそうされる前にナイフをブロリーの肉体に当てれば良いと考えたのだ。

しかし

バキィッ

ナイフを突き刺すどころか折れてしまった。

「え・・・」

「ふふふ・・・ああッハッハッハッハ！」

咲夜が驚いてる間に、ブロリーは隙をついてそのしなやかなに長く、筋肉質な手で彼女の頭を掴んだ。

「しまッ」

彼女が言い終える前に、ブロリーは空いた片手で拳を構えた。

咲夜は時を止めて逃げようと試みるが——ガツチリと掴まれた頭は動かない。

そして——ブロリーの拳が放たれ——

彼女はとっさに目をつぶった。

そして——

「・・・・・・・・え？」

不意に、何も起きない。

恐る恐る目をあげると、拳は自分の目の前で止まっていた。

そしてブロリーがそれを意図的にやったと気付いた時には、頭を掴んだ腕は離されていた。

「な、なんで・・・」

ブロリーは、姿を通常の『サイヤ人』に戻し、咲夜を見た。

「お腹が減りました。君を倒せば食べなくなります……」

低い声で、若干笑ってそう言った。

「えっと……」

彼女は反応に困ったのは言うまでもない。

本当に、性格の移り変わりの激しい悪魔だった。

「ご飯を下さい」

「で、ですが……」

「……下さい」

「しか」

「早く」

「……」

静寂がその場の空気を支配した。

話が続かない。言い返しても、状況が変わらなかった。

相変わらずブロリーは無表情。咲夜はさらに気まづくなる。

しかし、その場を破る救世主が現れる！

「一体何があったの咲夜——あれ？」

「あっ、お嬢様!？」

「ヘ
ア
ッ！
？」

紅い館 戦って和解 紳士のブロリー（後書き）

ブロリー「ブロリーです。今回のゲストは美鈴と咲夜さんです」

美鈴「どうも！紅美鈴です！名前間違えないでね」

咲夜「十六夜咲夜よ」

ブロリー「君達は俺と闘ってどう思ったんだあ……」

美鈴「えっ、そ、そりゃ――強かったですね」

咲夜「貴方、何者なの？」

ブロリー「俺は悪魔です」

こあ「悪魔と聞いて駆けつけました！」

トランクス「嘘です！全て嘘です！ブロリーは悪魔じゃなくてサイヤ――」

ブロリー「ゲストが追加されました…小悪魔ですかあ…」

こあ「宜しくお願いします！」

咲夜「まさかの追加ね」

美鈴「まあ、人数は多い方が楽しいですからね！」

トランクス「アハッ☆」

パラガス「トランクス。心配する事はない。お☆約☆束だからな」

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だぁ！ (前書き)

ブローリー「食べ物食べたいです・・・」

ちっこい悪魔　だが、悪魔は俺だあ！

「一体何があったの咲夜――あれ？」

「お嬢様!？」

「…………だれだあ？」

いくつかの扉の中の1つが開かれ、その中からは幼い蝙蝠の羽の様な物を生やす少女が出てきた。

ブロリーは静かに言うが、その小さい言葉を聞き取ったお嬢様なる人物はブロリーを見た。

そして怪我はしてないが服装の所々が痛んでいる咲夜。

次は粉々になった無数のナイフ、壊れた部屋全体。

すこし険しい顔になり、少女はブロリーを再度見た。

「まさかこれ……貴方がやったの？」

「…………はい…………」

何ら反応を見せずに頷くブロリー。

少女はそんな彼に違和感を覚える。

「何しに来たの？」

「お腹が減ったんだあ…………」

少女は驚いた様な顔になる

その顔は何かを我慢する様な顔でもあった。

そして――

「ぷっ――あっはっはっはははっ！」

笑いこけた。

「面白わね！で、そんな理由で館まで来て、こんな有り様にしたの？」

「何か悪いかなぁ？」

「ええ、凄く悪い事よ。こんな無茶な人は貴方が初めて」

だから――と少女は呟く。

「是非とも戦ってみたいわね。見た所、貴方は私には読めない『運命』を持っている」

ブロリーは少しだがピクリ、と反応した。

そして目を細めた。

運命、と聞いてだった。

もし、自分がこんな人生を歩んだのが全て運命のせいだったら――

生まれた環境、生きる事すら許されない、破壊でしか表現できない自分――

「運命、かぁ……。だが、俺がこんな人生を辿った事、全て運命だとしたら……。俺は、運命を」

「破壊し尽くすだけだぁ!!」

ビュウウウウンッ!

髪が逆立ち、眼光は緑に発光し、緑の光が散らされる。

彼は超サイヤ人になった。

それをみた少女はニヤリと笑む。

「戦う意思を見せたわね……。貴方がどんな力を持っているのかは知らないけれど、私はそう簡単にはへばらないわよ?」

ブロリーはさっきとはまるで違う、切り裂くような微笑みを見せた。

「ああそうだな。お前がすぐへばらない様に手加減してやる……。せいぜい、俺の遊び相手になってもらおうかぁ!!」

ブロリーの高ぶる感情と伴って光がより強まった。

「へえ、随分と自分の強さに自信があるようね。見た感じ、貴方は人間じゃない……。でも妖怪でもないわ」

「は、ツハハハハッ！俺は悪魔だあ！」

「嘘つき。魔族でもないわ」

「……お喋りは此処までだあ。さっさと始めようか……ッ。掛けてこい」

そう言い、彼は腕を差し出し、指でクイッと挑発した。

少女はニヤッと幼い顔に似合わない、悪魔の様な笑みを浮かべる。

「私はレミリア・スカーレット！この館の主であり吸血鬼！」

そう言い、少女——レミリアはブロリーに驚くべき速さで突っ込んで行く。

ブロリーはニヤリ、と笑い接近するレミリアを、無駄な動きをせず簡単に避ける。

「お前——中々速いな！流石は吸血鬼と褒めてやりたい所だあ！だが、俺を倒す事はできぬう！」

そう言った瞬時に、彼の手から光が漏れる。

そして、腕をレミリアの方向へと突き出し——

バシユンッ

気弾が発射された。

レミリアは気弾を避ける。

そして気弾は屋敷の壁に当たり——
チュドオオオンッ、壁は

吹き飛ぶ。

彼女はブロリーを見た。

「へえ、弾幕も撃てるのね」

「問う気も無いが、貴様等はスペルカードって言う物を使うらしいなあ」

「へえ、解ってるじゃない」

「スペルカードって言うのは『技』なんだろう？お前のスペルカードも是非見せてもらいたいものだあ！」

「ふうん、いいわ。見せてあげる、私のスペルをね」

彼女は腕を上げ、ブロリーを指差した。

「天罰『スターオブダビデ』！」

そう言った瞬時に、レミリアを中心に複数の紅い球体が現れる。

そして――ギョーンッ

その個々の球体から紅いレーザーと、青い光弾を複数ばら撒く。

普通なら避ける事が難しい技。弾幕勝負初心者なら一発でアウトだろう。

だがブロリーは――

「遅いな！」

彼は戦闘力が高い。サイヤ人自体戦闘力が高いが、その中でも最強とも言えよう彼にはどうってことはない

「やるわね、貴方。私の見込みはあったようだわ」

「スペルカードルールでは技を使う時、技名を名乗る必要があるらしいな・・・、俺もそのルールに則ってやろうか・・・」

そう言うのと、ブロリーの右腕に緑色のエネルギーが集まる。

「喰らえ! 『トラップシューター』!」

光を投げつけた――そして彼の手から離れた瞬間、エネルギーが無数の光弾へと分裂する。

その無数の光弾は、恐ろしい速さでレミリアへと接近していった。

「かなり難しい技を出してくれるじゃない!」

レミリアはそう叫び、まるで忍者の様な動きで無数の光弾を避けた。

そして、避けられた光弾は屋敷の扉へ向かい――ドオオオオン、これまた破壊される。

レミリアはしばらく余裕な顔をしていたが――

「・・・・・・・・えっ?」

遮断された日差し、扉を壊した事によって館内へと入ってきた。

それに気がついた彼女はすぐ、日差しから避けるように慌てて影へと向かった。

彼女は吸血鬼だ。強い半面、だから日差しを浴びると体が段々焦げてくると言う弱点もある。

だから日差しを避けるのだ。

「まったく、冷や冷やさせるわ……。このまま戦っても館が持たないわね……。すぐ片をつけよ」

ブロリーとの戦いを続行する為、ブロリーがいた方向を向く。
そして、次に視界に飛び込んできたのは――

「心配するなあ……。もう勝負はついているからな！」

「ッ!？」

ブロリーの手のひらだった。しかも、光が散らされている。このまま気弾やら何やら喰らえばひとたまりもないだろう。

「勝負、あったなあ」

「――私の負けね……。完全なる」

もうこの時点で、レミリアの負けは確定した。

＊

「美味しいです……」

ブロリー（元に戻った）は、レミリアとの勝負に勝った後、レミリアが折角だからと食事を出してくれた。

彼は妖精メイド達が出してくれる豪華な料理を食べているのだ。かなりゆっくりと大人しく食べている用に見える。しかし、かなりの速さで料理が無くなる。

「……食べ方にしては、料理の減り方が尋常じゃないわね……」

少し遠くから見ていた咲夜はそれに凄く疑問をもっていた。

「もつとくれないかぁ……?」

料理を運んでいるメイドに頼む。

「えええッ、またですか!??」

「……」

何かとションボリした様な表情になる。

メイドはその顔に負けたのか、調理室に向かった。

「……さらに、摂取量も尋常じゃない……」

咲夜は本気で考えていた。

（だいたい、彼は人間なのかしら……?でも見た感じ、妖怪でも吸血鬼でも妖精でもなんでもない……

しかし、あの戦闘力はこの幻想郷でもトップクラスに及ぶ強さ。

人間にも見えない）

そう考えている間にも、ブローリーはもう来た料理を平らげる。

「ふう……満足だなぁ……」

そう言うと、ブロリーは立ち上がる。

「あら、帰るのかしら？」

咲夜が問いかけた。

「元々、食事をする為だけにここに来ただ……これといった用はもうない」

「あのね……ここはお店とは違うのよ？」

「関係ない……」

（はぁ……本当に、なんなのよこの人……）

＊

ブロリーは館から出ていき、幻想郷上空を飛行している。特にやる事も無い彼。これからどうするかを考えていた。館に入る前までは、あまりこの郷に興味は無かったが、いざ弾幕勝負をしてみるとおもしろい物だった。

（……この幻想郷とかいう地——もしかしたらおもしろいかもしれないなぁ……）

そう呟いた。

ちっこい悪魔　だが、悪魔は俺だぁ！（後書き）

ブロリー「レミリアお嬢様です……」

れみりゃ「うー☆」

ブロリー「……あり？人違いかぁ……？生首だ……」

れみりゃ「うーうー☆」

ブロリー「……」

れみりゃ「うゝ☆」

ブロリー「＼かわいい／」

パラガス「パラガス☆うー☆うー☆」

ブロリー「……でえやッ！」バキッ

パラガス「door!？」

れみりゃ「うー☆」

ブロリー「……ブロッコリーあげるYO」

れみりゃ「うー☆!！」

ブロリー「親父ィも何かあげれば」

パラガス「よし、息子です。なんなりと」

ブロリー「親父ィ……」

パラガス「勘違いするな……。それはお前をお婿に言うとう

」

ブロリー「……れみりゃはペッドです」

パラガス「えゝゝえゝゝえゝゝ!？」

戦いを求む伝説 (前書き)

ブロリー「闘う意思を見せなければ、俺はこの幻想郷を破壊しつくすだけだあ！」

戦いを求む伝説

ブロリーは弾幕ごっこに興味を抱き、戦いを求めて幻想郷を飛びまわっていた。

(・・・強そうな奴を探そうかぁ・・・)

彼は無の表情で周り幻想郷を探しまわっていた。

彼は強そうな者を探していた。

かれこれ4時間は飛びまわっていた。

そんなに時間が掛ったのは理由があった。何故なら――途中、天狗に取材させられたからだった。

その天狗は速度が速く、ブロリーでさえ逃げるのに手間がかかった。その為、空は夕焼け。

彼はサイヤ人だ。強い相手を感じ取ったり、相手の力を感じる事ができる。

故に、彼はその能力を使い強い相手を探し当てようとした。

「・・・・・・・・そっちか・・・・・・・・」

彼は目を細め、その方向を見た。彼が見たのは下だ。

「でえいッ！」

ブロリーは一気に急降下する。

「ウオオオオオッ！」

だがそれだけでは留まらず、地面に風穴があいた。

そのまま掘り進み――ドゴォンッ

地下の空洞へとたどり着いた。

そして彼は下を見たが――かなり広い。

ここから地面までざっと、天と地くらいの差があった。さらに、何かと城下町の様になっている。

まさに地底界だった。

だが、彼は構わず地面へと急降下する。

ズドォォンッ、地面を抉りながらも軽々しく、カッコ良く着地したブロリー。

彼は周りを見渡した。

「・・・・ん？」

なにやら、そこら辺にいた住民らしき者がこちらを驚きの目でみていた。（何故かほとんど女性）

ブロリーは悟った。今日の前に居る者全てが人間でないと。

そう、恐らく人間がいないこの場所だからこそ、彼が導かれたのだろう。

ブロリーはにやり、と爽やかに笑う。

「・・・・はははははっ」

だが、そう笑ったあと、引き裂くような笑みを浮かべた。

そして――

「フツッハッハッハッハッハ、ウワッハッハッハッハッハッ！」

口を大きく開き、高笑いした。

その笑い方には、さっきの笑い方とは違く、なにやら狂気まじりな笑い声。

「な、なによアンタ・・・？」

住民が問いかけてくる。

「ブロリー・・・だ。今からお前等は俺と弾幕勝負してもらいぞ・・・ッ！」

住民達は顔を見合わせた。

「あ、アンタまさか妖怪なのか？」

「俺が妖怪・・・？違う。俺は悪魔だ・・・ッ！ハッハッハ・・・ッ」

「嘘突きなさい！貴方はどうみても魔族ではないわ！かと言って妖怪でもない！人間ね！？」

ブロリーは、ククッ、と悪魔の様に笑う。

そして――

「俺が人間程最弱と思っているのか・・・？」

「じゃあなんなのよッ！」

「俺はサイヤ人だ」

「はあ？！」

「さあ、手加減してやる。せいぜい俺を楽しませろ……」

ビュウウンツ

髪が青く発光し中途半端に逆立った。

この状態は半超サイヤ人。中途半端な超サイヤ人。

その気になれば、完璧な超サイヤ人にも、さらにそれを凌ぐ形態へとなれるが、彼は手加減するつもりなのだ。

簡単に勝っても楽しくないからだ。

ざっと、周りにいる住民達はざっと10人位だ。

住民達は少し驚いたが、また顔を見合わせ、ぷツ、と笑う。

「あつはっはっは！この数を相手に、手加減するだなんて、なんて身の程知らずなのかしら？可哀そうだから、まずあたし一人から相手よ」

一人の住民がブローリーの前に立った。

ブローリーはその住民を、その高い背で見降ろしたor見下した。

「どっちが身の程しらずか——教えてやる……」

静かに笑う。

そして二人は一気に距離を取った

「こっちから行くわよ！ 炎符『火炎車』！」

彼女がそう言った瞬間。

炎の円の様な物が現れ、ブロリーに向かって行った。

ボオオオッ

ブロリーはそれを避けず、そのままそこにたたずんでいた。

「いっけええええ！」

チュドオオオオオッ！

ブロリーに直撃し、爆発する。爆風で煙が舞い上がり、その場が見えなくなる。

「どう？あたしの弾幕は」

自慢げに胸を張る彼女。

今を見る様に、かなりまともにヒットした。強大なダメージを与えられるだろう。

回りの住民達も少しざわつき始める。

だが

「ふっはっはっはっは……ッ！」

「ッ?!」

煙の中からは、傷一つも無い無傷のブロリーがいた。

「こんなものか……。少々期待外れだったな……」

「そ、そんな……。私の攻撃をまともに喰らって無傷だなんて・

・・・」

ブロリーはニヤリ、と笑うと。

「もうお前には興味がないな……。一瞬で片をつけてやる……ッ」

住民は身を焦りながらも身を構え、守りを固める。
しかし――

シュンッ

一瞬にして、ブロリーはその場から消えた。

「ど、どこに……。…」

その場に居た者が驚いた時にはもう遅かった。

「まだまだ遅いぞ……。…」

「ふえ？」

後から声がした。

そして――

「ブラスターシェル！」

ドオオオオンッ

＊

「もうだめよ．．．強すぎるもん．．．」

戦い、負けた住民の一人は不貞腐れる様に行った。

「折角手加減してやったのに．．．こんなに雑魚だったとはな．．．」

その他の住民達は、

「お、おい。こんな奴と弾幕ごっこすんのかよ．．．」

「絶対負けちゃうよ．．．あんなに強い奴、あたしたちが全員で掛っても勝てないもの！」

「もう駄目だあ．．．おしまいだあ．．．」

「そこまで性根が腐っていたとは．．．いいだろう、私が相手になってやる！」

デデーン

「．．．こいつに勝てると思っていた私の姿はお笑いだったよ．．．」

「所詮、ムシケラといった所だあ．．．いくら雑魚が集まろうと無駄なのだ．．．！」

「ふん、次はどいつだ．．．」

「「「無理です」」」

声をそろえて言う。

「……腰ぬけめ……。しょうがないな。見逃してやろう」

「さ、流石男！女には優しいんだな」

なにかと調子に乗る住民。

「……なんなんだあ、その態度は……」

彼は右手を突き出し、気弾を撃つ準備のとりかかる。
それを見た住民は

「すみません調子に乗りました！」

「……まったく……」

そういい、彼は普段のサイヤ人の状態へと戻る。
そして後戻りしようと後を振り向くが

グウウウウ

「……お腹が減りました……」

そう言うと、再び住民達の方を向き、

「……食べ物をくれる場所ってあるのかあ……？」

「え？・・・ああ、あっちにあるよ」

「そっちなあ・・・」

＊

ブロリーは店に入る。

外の城下町の様なだけに、中も江戸時代っぽい。

サイヤ人であるブロリーに至っては、日本の文化など知る筈もない。そんな彼からすれば新鮮すぎる物だった。

「・・・本当に店なのか・・・」

「いらっしやいませ！」

店員と思われる者がカウンターにいる。しかも女性。

客席には少々の客。

ブロリーも薄々と気付いているが、なんかこの地に来て女しか見えない気がする。

しかし、人間の里の上を飛行していた時はちゃんと男がいた。

だが、妖怪などの人外に至っては何故か女ばかりな気が・・・

（なんで女しかいないんだあ・・・。まあいいか）

彼は疑問を振り払いつつも、カウンター前の客席へと向かう。

「何にしますか？」

ブロリーはメニューを見る。

メニューにあるのは――

焼き鳥（・・・・いやな予感がするなあ・・・・やめておこう・・・・）

ご飯（カカロットの息子オ？）

味噌汁

焼き肉定食（上手そうだな・・・・）

酒（・・・・えっ？・・・・俺、酒って飲んでいいのかあ・・・・）

親父ィ、生きてたら聞いてたんだが・・・・なんか虚しくなってきた・・・・）

彼は父、パラガスの事を思い出した。

パラガスは自分が殺してしまっている。だが、それは裏切られたから。そして利用されるだけ利用されたからでもあった。

あの時、彼は伝説の超サイヤ人の状態。自分でも制御できない事もある。そのせいで、勢いで殺した。

今考えれば――

「・・・・・・親父い・・・・・・」

だれにも聞こえないように呟いた。

「お客様、お酒ですよ」

不意に、店員が酒を差し出す。

「・・・・？・・・・俺は頼んでない・・・・」

「いえ、あの方が」

店員が腕をその方向へ向ける。

「？」

ブロリーはその方向を向いた。

そこには、もちろん身長2メートルのブロリーには劣るが女性の中では背の大きい女性がいた。

しかも、1本の紅い角を生やしている。服装は体操服の様なTシャツに、すこし透けたスカートを履いていた。

おそらく鬼、という分類だろう。

ブロリーの視線に気がついたのか、あっちもこっちを向いた。

「ん？ああ、それおごってあげるから」

彼女はそう返した。

「なんでだ・・・？」

「いや、なんか悲しい顔していたからね」

「・・・」

「・・・なにか言いたそうな顔だね・・・何があったかは問わないけど、まず飲みなよ」

「・・・俺は飲んでいいのか解らない」

「はは、言いに決まってるじゃないか」

「・・・」

「遠慮しないで飲みなよ」

ブロリーは渋々と、酒を口にする。

「……うまいのか解らない味だな」

「へえ、まさか初めてかい？ お酒飲むの」

「ああ……」

「ふうん、そう言えばさ、君って人間なの？」

「……サイヤ人だ」

「サイヤじん？ ……聞いた事ないなあ？」

「……」

「まあ、そう黙るなよ。君って物静かだね」

「……お前は『本当の俺』を見た事がないからそう言えるだけ……
……本当の俺はじゃない……俺は悪魔だ」

彼は不意に腕を自分の目の前まで寄せた。

そして、ポワーン、っと緑の光が漏れた。

この行為は警告でもあった。自分の事に触れるな、と。

「……そっか。あんまり深入りしない事にするよ。人には触れられたくない過去があるものだしね」

「・・・・・・・・」

そういい、ブロリーは酒を飲み干した。

そして呟いた。

「親父・・・・・・・・あの世で、元気にしてるかあ・・・・・・・・」

あの世からの偽りの自分（前書き）

ブローリー「NEETは血祭りにあげてやる…ッ！」

あの世からの偽りの自分

「親父イ．．．あのよで元気にしてるか．．．」

ブロリーは、そう呟いた。

＊

ある世界のあの世の地獄

ここは、地獄だ。

だが、地獄とは世界ごとに違う地獄がある。故に幻想郷の地獄ではない。

「．．．．．ブロリーなのか？．．．．．」

「ガアアアアアア．．．．．」

地獄のある場所に、片目に傷があり、戦闘服の上に白い布をかぶったすこし老いた男がいた。

彼はブロリーの父親、パラガス。

ブロリーを育て続けた張本人。そして、利用し見捨てようとした張本人でもあった。

だが、彼は後悔していた。あの世に来て、そう思い返した。

そしてその前にいるのは．．．．．

ドロドロな液体を被った化け物がいた。身長はブロリーと同じくらいである。

目は紅く、心臓がむき出しになっている。まさに化け物だった。

その化け物はバイオブロリー。ブロリーのクローン。

培養液を被ったせいで体がドロドロに溶かされ、原型が残っているのは後ろ髪だけ。

そんな見た目だが、パラガスは解った。

これはブロリーと似た様な気を感じる。サイヤ人の本能がそう伝える。

だが、それはブロリーではないとも伝えている。

「違うのか・・・？いや、気の質はブロリーと酷似しているが・・・気がブロリーより低い・・・」

パラガスはそう言う。

「ウワワアガアアアアッ！」

バイオブロリーは、問答無用でパラガスに襲い掛かる。

「しまった！」

しゅわっとッ！

パラガスはぎりぎり、上に飛行し回避する。

「くそお・・・アイツの実力はブロリーに劣るが、凶暴さは上の様だな！」

「ウヴァアアアアアアッ！」

バイオブロリーは全速力でパラガスの元へと向かった。

「くッ、もうダメか……ッ！」

パラガスは目をつぶったが――

ギューイイイイイイイインッ

突然、光が漏れ始めた。

何処から発せられているのかは解らないが、とにかく強い光。

「な、なんだこれは！」

その瞬間、パラガスとバイオブロリーはその場から消えた。

＊

その頃、幻想郷にてブロリーは

ブロリーは、地下……旧都から出てたばかりであった。

あたりは夜。

月が辺りを照らしていた。

そしてブロリーは、止まる場所を探していた。

今は人の里、という場所に行こうとしている。宿屋くらいあるだろうと思ったからだった。

現在、空を飛行していた。

「……ん？」

突然、胸や腕、足の到る所にはめ込んである真珠が光り始めた。

「これは……！」

彼は感じ取った。

自分に何者かが語りかけてきていると言う事に――そしてそれは自分と似た存在。強さこそは違うが、何か自分の気と共通点を感じられた。

そして、次の瞬間――キュウイイイインッ

光が溢れだした。

そして――その中から

化け物が現れた。

「……………な、なんだお前は……………ッ！」

「ヴァアアアア……………」

その化け物はまるでドロドロとした液体のような者を纏っており、心臓などがむき出しになった化け物――それはバイオブローリ―だった。

「……………お前……………俺か？」

彼は共感できた。

自分と似た様な気質をもっているのはこいつの事だった。

「ヴァアアアアアアアアアアア！」

飛びかかってきた。

ブロリーは、スツッと避ける。

「スピードは・・・俺以下のような」

だが油断できない。

どんな強さを秘めているのか知れた事ではない。自分と似た気質を持っているのなら尚更。

ギユウウンッ

ブロリーは、超サイヤ人状態となる。

髪が金色になり逆立つ。そして眼光が緑になる。

「でえいやッ！」

全力で突っ込み、全力のパンチを喰らわす。

「ウオオオッ」

化け物がよろめく。

「死ねい！」

それに追い打ちをかけるように、後に瞬間移動し、キックを喰らわせる。

「グウウウツ、ウガアアアアアアッ！」

キックを喰らわせるが、よろめいた反動で後を向き、あっちも拳を放つ。

「何——ぐあああッ！」

ブロリーは吹き飛ばされる。

吹き飛ばされながらも態勢を立て直す。

「ヴァアアアアアッ！」

バイオブロリーは気弾を放ってくる。

「でえい！」

それに対抗し、ブロリーも気弾を放った。

バシュンツ、気弾同士ぶつかる。

そして、1秒もしない内にブロリーの気弾が押し、バイオブロリーへと向かっていく。

「グアアアアアアッ！」

それはバイオブロリーに直撃する。

それを見たブロリーは鼻で笑った。

「ふん、どうやら気の使い方は俺の方が上手い様だな。取り柄はパワーだけ……その程度の実力では俺を倒す事はできぬう！」

ブォォォオンッ

金色の気がブロリーから大量に放出された。その金色の気は実力の差を見せつけるようでもあった。

「グガアアア・・・ッ」

バイオブロリーは背を向け、逃げようとする。

「させるか！消えろ！」

彼の右腕から緑光が出現。それはやがて、大きな球体となる。ブロリーはそれをバイオブロリーへと投げつけた。

それは恐るべき速さでもう一人の自分へと向かい。

「ブラスターシエル！」

「グアアアアアアッ！」

直撃する。

バイオブロリーは力尽き、そのまま森へと落下していった。

「・・・終わったな、所詮、クズはクズなのだ。はは、ッハッハッハッハッ！ウワッハッハッハッハッハッハッ！」

あの世からの偽りの自分（後書き）

ブロリー「ドロリーの強さについては作者の適当設定です…」

ドロリー「ヴァアアア（これで終わりだと思うなよ）」

パラガス「なんて事だ…。能天気で足手まといな息子が増えた…」

ブロドロ「デエエィッ！」

パラガス「DOOR！」

＼デデン／

ベジータ「もうだめだぁ…おしまいだぁ…」

？円「奴等を倒さなければこの宇宙は終わりだ！」

パンツ「あんな奴を生かしておいたら、宇宙は破壊し尽くされてしまう！」

孫悟空「奴をこのまま生かしておく訳にはいけねえ！」

ブロリー「血祭りにあげてやる」

ドロリー「ヴァアアアッ！」

一同「ぎゃあああああああああああああああッ！」

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会（前書き）

パラガス「パラガスでございます」

ベジータ「パラガス！出しゃばるんじゃない…」

ブロリー「お前がな」

ふおおッ、キイイイン ドゴオオオン

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会

ボオオオオオオンッ

幻想郷の森に、何かが墜落した。

「ウウ・・・カゝアアア・・・」

バイオブロリー。

彼は空中にてブロリーの気弾によって撃ち落とされた。
そして、現在に至る。

「アア・・・ガアアアアアアアッ！」

バイオブロリーは怒り狂う。

理性がない彼の頭の中は、ブロリーへの復讐一色となった。
彼は空へ舞い上がり、ブロリーを探そうと飛び去って行った。

ブロリーは人間の里へと来ていた。

泊る場所を探すためだ。

この地に住むと言う事になれば当然住む場所も必要となるだろう。
恐らく、人里だから宿屋くらいあるだろう・・・と思っていた
のか？ではなく思っていた。

現在は夜。と言っても夕方と夜の間。
月が微妙に出ている微妙な時間帯。

人里には人が出歩いていたが、身長2メートル以上でイケメン、そして変わった服装のブロリーを珍しげに見ていた。

「何かと注目されているな．．．．それより、宿泊場が先だあ．．．」

適当に当たってみる事にした。

そこらへんの住民に話かける。

「ここら辺に宿は無いか．．．．？」

「う、うわっ、背でかい．．．．。って、あ、宿屋？」

「．．．うむ」

「こ、ここら辺には——いや、宿はないけれど、止めてくれる所はあるかもしれませんよ？」

「そうかあ．．．．。で、心当たりはないのか」

「えっと．．．．うーん．．．あ、寺小屋とかは？」

「．．．．寺小屋ってなんだあ．．．．」

「あそこにある、少し大きい家ですよ」

「あれか．．．．」

＊

こうして、ブロリーは寺小屋の前に来た。
そして、ドゴドゴッ、と少々強めに門をノックする。

「・・・・・・・・反応がないな・・・・・・・・」

ブロリーはすぐに痺れを切らし、門を破壊しようとする。
と、拳を振りかざした瞬間

「一体なんの——うわ！」

「・・・・・・・・ッ！」

突然門が開かれる。

ブロリーはぎりぎりです拳を止める事ができた。
門から出て来たのは少女。頭が変わった帽子の様な物を被っている。

「い、いきなり殴ろうとするなんて、何を考えてるんだ?!」

「・・・・・・・・早く出てこないお前が悪いです・・・・・・・・」

無表情で言う。

「いや、早く出たつもりだよ。そこらへんの礼儀は重んじている」

「・・・・・・・・それよりも用があつてきた・・・・・・・・」

「何?」

「宿泊ってできるのかぁ・・・？」

「――宿泊？」

「あぁ」

「うむ・・・ただ泊めるってのは少し抵抗があるんだが・・・」

」

「・・・・・・・・」

「うちは寺子屋だから、何かしら手伝ってくれるんじゃないぞ？」

「手伝いかぁ・・・面倒くさいな・・・」

「そこら辺は君の自由だ」

「・・・・・・・・解った」

「と言うと、条件を飲むって形でいいか？」

「あぁ」

「そうか、まぁ入りなよ」

＊

「ここが君の部屋。丁度空いてる部屋があったから」

「変わった部屋だな・・・」

彼が連れられたのは、普通の庶民風の部屋。

だが、ブロリーにとっては珍しい部屋。何せ、地球で暮らした事自体あまりない。

1時期、7年間居たがその時は氷漬けにされていた。

「自己紹介してなかったな。私は上白沢慧音。この寺子屋の教師をやっている」

「……俺はブロリーです」

「ブロリー？変わった名前だな」

「……そうかあ？」

「君は外人かい？みた感じ、変わった容姿をしてるし……」

ブロリーの容姿

身長2メートル超えて、上半身裸でチャンピオンベルトのような金色のベルトと、その下に赤いものを腰に巻くように付け、白い胴着を下半身に着ている。

首にはベルトに似た首飾りを下げ、手首にはベルトとデザインが同じ長めのブレスレットを装着。靴とベルトのデザインがほぼ同じ。

そしてイケメン☆

「そう言う事になる……かもしれない。詳しい事は話す気もない……」

重苦しく言う。

そんな彼の様子に慧音は目を細める。

「何かしら事情がありそうだな」

そう呟く。

「・・・それよりも、手伝いつて何をするんだあ・・・？」

泊まる条件を思い出したブロリーはさっそく聞いた。

「まあ、簡単に言えば事業の準備を手伝ってほしい」

「準備か。それだけか・・・？」

「うゝん、後、休み時間とかに子供達に構うくらいかな？」

「子供か・・・」

ブロリーは子供と聞き、以前戦った二人の子供を思い出した。
その時に戦ったせいとか、子供に構うと聞くと戦いの事しか思い出せない自分が何かと悔しいブロリーであった。

「他に聞きたい事は？」

「ない・・・」

「それじゃ、ごゆっくり」

そう言い、慧音は部屋を出ていく。

「・・・やる事がないな・・・」

宿泊先が決まったものの、まだ眠いと言う訳でもない。
彼は何かやる事を見つける事にした。

「夜の散歩でもいくか……」

そう言い、部屋を出た。

＊

外に出たブロリー。
もう夜になっていた。辺りに並ぶ家の1つ1つの明かりが、夜道を照らしていた。

「……素通リーです……」

適当に歩きだす。

ダッダッダッダッダ

「……ん？」

だれかがこっちに走ってくる音がする。

「……敵か？」

明らかにこっちに向かって来ている音。
次第に音が大きくなってきている。

「誰だ……」

ブロリーは身構えた。
もしかしたら、敵かもしれない。しかも夜だ。暗い所をつけ狙う輩もいる。

そして――

「ブロリー！」

来た！　ブロリーはそう悟る。
後からだ。

ブロリーはとっさに後に回し蹴りをした。
バキッ、直撃する。

「D O O R ツ！？」

叫び声がした。なんか聞き覚えがある気がするが、あまり気にしない。

どうやらヒットしたようだ。ブロリーは得意げな表情で、その者を見た。

が、ブロリーは驚愕した。

「ヘアッ！？親父い！？」

そう、目の前に居たのは地面に倒れた自分の父親パラガスであった。

「な、なんで親父が……死んだ筈じゃ……」

瞬時に疑問がたくさん生まれた。

「ぶ、ブロリー、一体、どうしたと言うんだ、何故俺を……ま、まさか」

残念そうな顔になり、そうか、と呟く。

「無理も無いか……。お前を操り、その挙句見捨てたのは張本人はこの俺なのだから……。 」

「お、親父イ……。 」

「すまん！」

ガバツ、っと倒れたまま頭を下げた。

「これまでの事をすべて謝る！俺がお前にした、数々の仕打ち……。 全てに対して反省している！」

「親父イ……。 頭を上げろ……。 」

ブロリーはパラガスの肩に手を置く。

「許してくれとは言わないが……。 いままで済まなかった……。 」

「親父イ……。 どうでもいいからそんな事より」

「ゑゝゑゝゑゝゑゝゝ！どうでもいいって……。 」

シュワット頭を上げ、ブロリーを見た。

なんでこんな軽く流すんだ！？とそう叫ぶ。

「どうやって生き返ったんだ？」

「そ、それは――あの世で化け物と戦っていたら――ここに居たのだ」

「・・・・・・は？化け物ってなんだあ・・・・・・」

「ドロドロした化け物だぞ」

ドロドロした化け物――ブロリーには見覚えがある。
数時間前に気弾で撃ち落とした者。

「・・・・・・そうかあ、あの化け物はあの世から来たと言う事になるなあ・・・・・・」

「お前のあの化け物にあったのか？」

「・・・・・・はい・・・・・・」

「そうか・・・・・・――と言うよりも、ここはどこだ！」

「幻想郷だ・・・・・・」

「幻想郷・・・・・・ま、まさか・・・・・・！」

パラガスは驚愕する。

ブロリーはそんな親父に疑問を抱いた。

「知ってるのかあ？」

「ああ、知ってるとも。かなり前の事だ。地球に帝国を築き上げる為に事前に地球の事を科学者に調査させた時に知ったのだ。

詳しい事は探れなかったが、たしか妖怪とか言う化け物が住んでいると聞いた」

「……だいたいあってる」

「む、まさかブロリー。妖怪とあったのか?!」

「はい……」

「そうか……。では本当に幻想郷なのだな……。ん、待てよ、住む所は確保してるのか?」

「はい……」

「そうか……。流石俺の息子だ。俺と似て下準備は欠かさないんだな。はあっはっはっは!」

「全然似てないです。俺の方が上です……」

「ゑゝゑゝゑゝゑゝゝ!?!? そんな事があるう筈はございません。この私より頭が劣るブロリーが、この私以上など……」

「なんなんだあ、その態度はぁ……。?」

「シュワットツ! お助け下さい!」

「……できぬう!」

「あああっはっはっは、あああっはっはあああ．．．」(泣)

デデーン

＊

寺小屋では――

「夕食の準備は終わりつと．．．ん？」

ガラガラ、扉が開かれる音がする。

「ブロリーか？確か出ていった筈．．．帰って来たのか」

そう言い、慧音は玄関まで行った。

そして、慧音は驚く。

「ぶ、ブロリー。その傷だらけの人は．．．」

「親父ィです」

「ブロリーに八つ裂きにされたパラガスでございます．．．」

ブロリーに八つ裂きにされたパラガスは無理矢理、涼しげに言う。
体のあちこちに傷がある。

だが、無理矢理だけに顔が引きつり、その痛さが伝わってくる。

「ブロリーの父．．．本当に父親？似てないと言うか．．．だ
けど変わった服装と言う事は共通してる．．．」

「……似てるなどと、その気になっていた俺の姿はお笑いだったぜ……。ふぁあっはっははは……。…」

何やら泣きそうに言うパラガス。

さっき、自分の息子に言われたばかりなのに——— こんどは他人から言われるとは……。パラガスは非常に悲しくなってくる。しまった、っと慧音は慌てだした。

「す、すまん、気に触ったか？」

「その様な事が有ろう筈がございません。慣れっこだからなあ……。…」

パラガスは強がりと言った。

ブロリーは無表情だが、プツッと一瞬笑った様な気がする。

「慧音。親父イも泊まらせるがいいか？」

「ブロリーと同じ部屋ならいいが」

「解った……。親父イ。こっちだあ」

「……では、ゆっくりさせてもらおうとしよう。ありがたく思うぞ」

と、パラガスはせめてもの礼儀で慧音にお辞儀する。

「親父イ……」

「？」

「二人用のポッド」

「やめろおおお！」

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会（後書き）

ブロリー「作者めえッ！投票が遅いです…」

作者「やめろおお！お助けください！お助けおお…」

ブロリー「クズがあ…」

作者「事情があつたんです！学校とか期末テストやら
ならず者「反抗する気か！」

？円「そこまで性根が腐っていたとは…」

ベジータ「馬鹿な作者め…」

パンツ「根拠もない言い訳を言いやがって」

孫悟空「それよりオラ腹減っちゃったあ、ヘッヘッヘッヘWW」

タコ「コンピュータのはじき出したデータによりますと作者は
壊れておりますじゃWWWうわへへWW」

ブロリー「ここがお前の死に場所ダァ！」

デデーン

作者「自分はあ、ブロリーの手によって手厚く葬られました」

手伝いだYO（前書き）

ブロリー「やあ。ブロリーです…今回は慧音の手伝いです…はい…」

手伝いだYO

夜

ブロリーは、寺子屋の部屋で寝ていた。

彼は『掛け布団』で寝るのは初めてだった。第一、人生のほとんどを破壊でしか経験してないか彼にとっては、布団で寝ること自体あまりない。

彼はは、今まで味わった事のないまったりした時間を過ごしていた。

だがしかし――パラガスは違う。

パラガスはこんな夢を見ていた。

「どこにいくんだあ………？」

「お、お前と一緒に………非難する準備だあ！」

「二人用のポッドでかあ………？」

「ッ………！」

ガシッ………バキバキッ

「うああああ、ウオオオオオオオオオオオッ！」

バキバキバキメキッ

「ぐおおおッ、自分の子供に殺されるとは………これもサイヤ人の定めか！」

「グウウウ、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

バシュツ、ヒュウウウウウウウウツ

デデーン

「ふああっはっはっはッ！、ああっはっはっはッ（泣）」

そして現実――

「シュワツトツ！」

パラガスは跳ね起きた。

何故こんな悪夢を見たのか――それは彼の死因にあった。

彼の死因はブロリーにポッドごと潰され、彗星に投げ飛ばされた事。その際にポッドに挟まれていたのだ。

そして今、掛け布団と敷布団に挟まれている。

そのせいでこんな夢を見てしまったのだ。

「なんだ・・・夢か。まったく俺・・・一体どうしたというんだ・・・ん、ブロリー。何故拳を握っているん・・・」

「親父イ・・・うるさい！」ドキャツ

「DOORッ!？」

そして違う部屋にて慧音は――

「うう・・・騒がしいな・・・」

そして次の日

朝、ブロリーは目が覚める。

「・・・・・・・・朝かぁ・・・・・・・・」

そういい、彼は布団から出る。

そして、少し離れたパラガスを見る。

「D O O R !」 「ヘアツ! ?」

突然パラガスは跳ね起きる。

それにブロリーはお馴染みの叫び声をあげた。

「ゆ、夢か・・・・・・・・ん、も、もう朝なのか・・・・・・・・」

実はパラガス。あれからずっと悪夢を見て寝れなかったのだ。
目の下のはクマがあった。

「くそお、寝不足になってしまった・・・」

「親父ィ・・・・・・・・」

「なんだブロリー」

「俺は慧音の手伝いをしなきゃなんないんだ・・・親父イは手伝うのかぁ・・・？」

「・・・いいかブロリー。寝不足の俺が手伝ったりしたら、足手まといになるだけだろう？」

「・・・そうかぁ・・・（もしNEET^{ニート}になったら血祭りにあげてやる・・・）」

そういい、ブロリーは部屋から出て行く。

＊

朝、ブロリーは慧音に会いに彼女がいそうな部屋を片っ端から当たった。

「・・・あっちかぁ・・・？」

そういい、襖を開けた。

「むう・・・？」

何やらおいしそうな匂いがした。

そして、ブロリーは部屋を見わたす。

そこにはかまどなどを使って料理する慧音がいた。

「あ、ブロリー。丁度良かった。そっちのかまどにも火を点けてくれ」

「……これかぁ……」

「道具とかそこにあるから、それ使って」

マッチ、の他にもチャッカマンとかある。

思い返せば、家や置物、家具から小物まで時代に囚われていない物ばかり。

原始的な物もあれば、チャッカマンなどの技術が発達している物様々。

と、関心しているブローリーだったが、使い方が解らない。

と言うか彼はそもそも道具を使う気はない。

「……」

彼は薪が並べてある所に手をかざした。

やがてその手は緑色の光を散らし

バシユンッ

小規模の緑の気弾が薪へと向かい、直撃する。

ポッ 見事に火がついた。

それを横目で見ていた慧音であったが、少々驚いた様にブローリーの方を見て言う。

「君……能力があっただ……」

能力——この幻想郷では主に妖怪や妖精、または魔法などを使う一部の人間がもつ物。

当然一般の人間がそんな能力を持っている訳がない。修行をすれば

使えない事もないが、まず普通の人間はそんな事は考えない。と言うと、話は簡単。ブロリーは普通の人間じゃない。

「・・・これがどうかした？こんなの普通じゃないのか？」

ブロリーは幻想郷に来て、不思議な力を持つ者にしか会ってない。それ故、これが当たり前だと思っているのだ。

「いや、ここらの一般人は能力を持つ者が少ない」

「そうなのかぁ・・・ん？」

ブロリーは何かに気がついた。
彼の視線は鍋。

「・・・慧音」

「？、なに？」

「もう煮えてるぞ？」

ブロリーは鍋を指差す。

鍋には味噌汁が入っていたが、無駄に沸騰して今にも漏れそうだった。

「え？あああッ！」

彼女は驚き、慌てて鍋をかまどから取り上げた。

＊

料理が終わり、テーブルには料理が並べられている。

それは普通の和風料理。ご飯、味噌汁、魚、その他おかず少々。それが3人分だった。

二人は座布団に座り、食べ始めようとしている。

「ブロリー、君の父は呼ばなくていいのか？」

慧音が問いかけた。

二人が作った料理は慧音、ブロリー、パラガスの3人分。

「……………ん？親父イかあ？そうだな……………」

だがその次の瞬間ブロリーは「あっ」と何か思いついたような表情になる。

（親父イは今寝ているなあ……………だったら、俺が親父イの分を食べても問題はない……………）

そうひらめくと、ブロリーは慧音にこう言う。

「親父イは寝ているから、俺が親父の分を食べる……………」

「え？寝ているの？」

「はい……………」

「そうか、じゃあ食べようか。待つのもなんだしな」

そう言うと、慧音は手を合わせる。

「いただきます」

そう言った。

ブロリーは「は？」と訳の解らない表情をした。

「ん？どうした？」

「・・・『いただきます』ってなんだあ？」

その言葉に慧音は以外そうな顔をする。

「以外だな・・・知らないのか？いただきますは、料理を食べる前の挨拶だ」

ブロリーはサイヤ人。地球の事、ましてや日本の風習なんて知っている訳がない。

故にそれに疑問を抱く。

「・・・それをやらないとダメなのか・・・？」

こくりと頷く彼女。

ブロリーは少し険しい顔になったが、早く食事をしたいのでやることにする。

「いただきます」

「よくできました！」

「・・・子供扱いか・・・？」

そう良い、食事を始めた。

.....

食事を初めて1分もしないが、ブロリーはもう食べ終わってしまった。

慧音はブロリーの食いつぷりに目を引かれ、食事に集中できなかった。

「は、早いな。食べるの」

「あれくらいならペロリーです.....」

「君って.....本当に人間なのか？さっきの能力といいその食べっぷりといい、色々と異常なんだが.....」

「.....俺は悪魔だ.....」

無表情な優しそうな顔でいう。

慧音は半信半疑で「へえ.....」と呻る。

ぶっちゃけ、如何にも好青年みたいなその顔で悪魔なんて言われても説得力がない。

だが彼女は知らない。彼の違う姿を——恐ろしい力を

「.....慧音。食べ終わったらさっきみたいに挨拶するのか？」

「ん、食べ終わったらごちそうさまだ」

「.....ごちそうさま。こうかあ？」

「そう。今度から言う様にね」

「はい……ん？」

ブロリーは何かに反応する。

それは声だ。なにやら騒がしい。

まるで無邪気の子供——いや、子供そのものの声。

「ん、そろそろ来たみたいだな」

慧音が立ち上がる。

「どこに行くんだあ……？」

「そろそろ授業が始まるんだ」

「そうかあ……俺は何をすれば良いんだ？」

そう、ブロリーは宿泊させてもらう条件として手伝いをする約束をしている。

「確か二時間目に体育があったな……君は体格が良いから、運動が得意なのか？」

運動……もはや彼にとっては息をする位に簡単な事。

彼は戦闘民族。故に、戦闘が本職の彼にしては準備運動にすぎない。

「……ふん、簡単な事だ」

「そうか、じゃあ子供たちの相手をしてくれ。やる事は後で連絡するよ」

「……1時間目は俺はどうすればいいんだあ？」

「まあ、適当に授業を見るといい。子供たちの顔を覚えて貰うのに丁度良い」

「……」

＊

こうして授業が幕を開けた――

「――それで全ての妖怪が初めて博麗大結界が妖怪にとってメリツトとなると解り、騒動が収まった」

教卓では慧音が先生として、子供達に説明をしていた。

子供の中では真面目に聞く者もいれば、単に集中してない者と座っていて足が痺れて集中できない者もいる。

だが、集中してない者が多い――いや、集中できない者が多かった。

何故ならば後でブロリーが立って見学しているからであつた。

それもそうだろう。長身筋肉質かつイケメン☆がいるのならば。

しかもたまに「全然解らないです……」とか「カアカロットオ……」

とか呟いているのなら尚更。

そんな調子で授業は続いた。

＊

よく頑張ったがとうとう2時間目が来たようだなあ！
内容はサッカー。

昔に博麗大結界で外の世界と遮断された幻想郷にそんな競技がある訳がないが、まれに来る外来人がサッカーを伝えたらしい。

それで幻想郷でもサッカーは競技の1つとされている。

そして場所は外。名は無名の丘。

広く、自然が豊かな草原だ。丁度、運動するにはもってこいの場所。そしてブロリーの中では暴れるのに持ってこいの場所でもある。

「じゃあ皆、この時間は彼が面倒を見てくれるぞ」

「ブロリーです・・・」

子供達がざわついた。

「やっぱり、あの人って新しい先生だったんだ」

「でも格好がへんじゃん」

「イケメンだよ」

「物静かそうだね」

「でも筋肉しゅごい」

一斉に多彩な会話が耳に入る。

「皆静かにー。じゃあ、事前に決めたチームに分かれてゲームスタート」

＊

「・・・動きが遅いなあ・・・」

サッカーをしている子供達を見て、ブロリーはそう呟いた。

「そうかな？あれくらいの子供だったら、普通じゃないか？」

「・・・そうなのかあ？」

と、そんな会話の途中。

「ぶろりー先生」

子供が話かけてくる。

（先生ってなんだあ？）

そしてブロリーにサッカーボールを差し出す。

「先生もボール蹴ってみてよ」

「・・・俺がかあ？」

「うん！見たいよね皆！」

うん！と一斉に頷く子供達。

ブロリーは無表情な表情の中に若干な戸惑いを見せつつ、ボールを受け取った。

そうして、ブロリーのキックオフが始まる。

ルールは、ブロリー一人対子供9人。

故に、ここで外すとカッコ悪い。

ブロリーはボールを向き、次のキーパー、ゴールを見る。

「・・・フンッ！」

バンッ！

彼はボールを真上に蹴り飛ばす。

ヒュー、ボールは真っ直ぐ上に飛んで行った。

それを合図に子供達は動き出す。数人がブロリーへと向かって言った。

ポン、ヘディングで受け止める。

ポンポンポン、そのまま子供達をおちよくるように頭でボールを受け止め続けた。

だが、数回やった所でブロリーは回し蹴りでキックする。

そしてボールは数メートル行った所で地面に落ちようとするが――

ダッダッダッダッダッ

ボールが落ちる直前にボールを思いっきり蹴る。

ギユウウウウウウッ

まるで空気を切り裂くような音がした。

キーパーはゴールのど真ん中に居たが、ゴールの隅にボールは入る。

だけで収まると思っていたのか？

「ん？」

「ボールなくなっちゃたし、ブロリーせんせーもいないから・・・なにすればいいんですかー？」

「うむ・・・仕方ないし、来るまで違う事を」

しよう——と彼女はいったが、それは破壊音と共に消え去る。

爆発音が聞こえた方向を彼女達は見た。

そこには——3メートル程で人型の——何やらドロドロとした液体に包まれ、内臓が筋肉がむき出しになった化け物がいた

「なッ——！」

「ヴァアアアアアアア・・・ッ！！」

今、第二のブロリーが、彼女達の前に現れた——

「ヴァアアアアアアアッ！！」

バイオブロリーは慧音と子供達に向かい、大声で叫んだ。

「な、なんだんだ・・・あれは・・・」

慧音は驚愕の目で化け物を見る。

幻想郷にこんな生物はいない。歴史を司るとも言えよう彼女でさえ知らない化け物

そんな化け物に対し、子供達は泣くどころか声まで出ない。ただそ

こで、怖くて動く事もできない

慧音は、瞬時に化け物からの殺意を察知する。
相手は襲い掛かってくると理解した。
それは予想どうりの結果だった。

「ヴァァァァァ・・・」

この世の生物ではないような呻り声を上げ、バイオブローは慧音へと、ゆっくり歩いてくる。
ドチャ、ドチャ――その体に纏う液体のせいか、歩くことに奇妙な音を慣らす。

「クッ――」

明らかに正常な生き物じゃない。そう悟った彼女は全力で戦う他ならない。

教え子もいる。何としても守らなければならない。

「スペルカードで行くしかないな・・・」

そう言う――彼女は叫んだ。

「日出づる国の天子！」

そう叫ぶと、彼女の目の前から無数のレーザーが発射された。
それはまさに太陽が地を照らす様だった。
そんな無数のレーザーがバイオブローに襲い掛かる。
これは彼女のラストワードだが、異常な化け物を相手にするには最初から本気を出した方が良いと感じたのだ。

もはや、相手はスペルカードルールを守らないでくるだろう。それは、相手の理性のなさで解る。

下手をすれば、これは単純な殺し合いになるかもしれない。

ドオオオオオオンッ

光線は化け物にほとんど直撃する。

砂埃が舞い上がる。

「……くッ、やはり、あまり聞いてないようだ……」

煙の中から出て来たのは、ほぼ無傷とも言えようバイオブローリーだった。

化け物は再び、慧音を睨めつける。その真っ赤な眼光で。

「ガアアア、ヴァアアアアアアアアッ！」

バイオブローリーは手のひらを慧音へと向ける。

キュウウンッ

緑の光が現れ、それを投げつけた。

「おっと！」

そう良い、ギリギリ避ける。

チュドオオオオンッ！避けられた光線は地面へ直撃すると、爆発を起こす。

（予想どおり、スペルカードルールを守る気はないみたいだ……）

スペルカードルールには、技を繰り出す前に、技名を言うのがルー

ル。しかし、化け物は技名を口にしてはいなかった。

「くそ、何か打つ手は……」

「ヴァアアアア！カアカロットオオオオオオオオッ！！！」

ズキュウウンッ！バイオブローリーは凄い速さで慧音へと接近する。

「しまった——うぐッ！」

化け物は慧音の目の前で停止すると、腕を掴みあげ慧音を宙ぶらりの状態にした。

「ヴァアアアアッ！」

化け物が慧音の目の前で大きく口を開け、呻る。

恐ろしく歯をむき出しにし、もはや人の粘膜ではない口の中が露出された。

そして——空いている片方の腕を構える——

「くっ！」

そして、腕は振り下ろされた——

手伝いだYO（後書き）

ブロリー「何イツ！？まだ生きていたのか…」

パラガス「先生がピンチ——という訳だあ」

孫悟空「オラあ、ワクワクすんぞ！そのバイオブロリーって奴と戦いてえな！」

ドロリー「ヴァアアアア！（呼んだか？）」

孫悟空「やベツ！」逃走

ブロリー「どこにいくんだあ…」

孫悟空「おめえ等ちよっとしつけえぞWW」

伝説 今ここに降臨(前書き)

ベジータ「タイトルからしてもうだめだあ…おしまいだあ…」
孫悟空「ベジータの奴しょうがねえなあ(笑)」
パラガス「……」(眠りです)

伝説 今ここに降臨

「しまった——うぐッ！」

バイオブローリーは慧音の腕を掴みあげ宙ぶらりの状態にした。

「ヴァァァァアッ！」

化け物が慧音の目の前で大きく口を開け、呻る。

恐ろしく歯をむき出しにし、もはや人の粘膜ではない口の中が露出された。

そして——空いている片方の腕を構える——

「く、くそ……せめて満月だったら——夜だったら——
ッ！」

そして、腕は振り下ろされた——

「せ、先生……！」

子供が叫んだ。

そして次の瞬間、響いたのは轟音——

と思っているのか？

チュドオオオオンッ！！

突然、バイオブロリーの脇腹に光弾が直撃した。

「ヴァアアア!？」

化け物は態勢を崩し、慧音から手が離される。

「きゃっ！」

いつもにない女性らしい声を上げ、慧音は地へと落ちた。

慧音は態勢を直すと同時に、光弾が飛んできた場所を見た。
そこには――

「ぶ、ブロリー……」

そう、ブロリーがいた。

彼はいつもは無表情な顔をしているが、今は強張った強い表情をしている。

「化け物が……まだ生きていたのか……」

そう言う――バシユンツ!

髪が金色に輝き、眼光が緑に光る。超サイヤ人になった。

その見た事のないもう一つの姿に、慧音は驚く。

「止めを刺してやる！」

強く言う。

彼の声にはいつもにない——強さと、勇気と——何より殺意が籠っていた。

「うおおおおおッ！」

「ヴァアアアアッ！」

両者一斉に飛びかかった。

ズダダダダダッ

激しい殴り合いが始まる。

そのスピードはすさまじく、慧音達から見れば何が起きているのか見当もつかない程。

「ぐあああッ！」

バイオブロリーの拳がブロリーにヒットする。

そのままブロリーは地面に直撃する。

ズドオオオンッ、地に大きなクレーターができた。

ズドドドドドッ！

それに追い打ちをかけるかのように、化け物は一回一回重い攻撃を何回も撃ちつけた。

「グアアああッ！ウガアアアッ！？」

「ヴァアアアアアアッ！」

ズドオオオオンッ！さらに重い一撃がブロリーを襲った。

「ぶ、ブロリー！逃げろ！勝てっこない！アイツは化け物だ！」

慧音が叫ぶ。

ブロリーは倒れるが――ふん、と吐き捨てるとその場で起き上がり距離を取った。ペロリと口ものの血を舌で舐め、ニヤリと笑う。

「っ？」

「ヴァッ?!」

慧音とバイオブロリーは、その場違いな態度に疑問を抱く。

ヒュンッ!ブロリーは瞬間移動し、バイオブロリーから十数メートル離れた場所へと行く。

「ふん、やるな・・・。だが――その程度のパワーで俺を倒す事はできないなあ!」

そう言うのと、ブロリーは手を握りしめる。

「ああああああアアアアアゝアゝアゝ!!!」

突然叫ぶ。だが、その叫びはただならぬ悪寒を感じさせられた。まるで――背筋を凍り付けられるような――

その途端、この場の空気が変わった。

ブロリーの周りに緑色の光が集まって行く。

ゴオオオオ、暴風を巻き起こった。

空は曇り、稲妻が轟く。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

野獣の様な叫びと共に、ブロリーが炸裂する
その炸裂と共に、有り余った閃光が放出された
ズドオオオオオオオンッ！！

「ぐ……ッ」

100メートル以上離れた所に居る慧音や子供達さえ、バランスを崩しそうになった。

だが、ブロリーの近辺は恐ろしい事になっていた。

地面は抉れ、ブロリーは宙に浮いた状態。

そして当のブロリーは――

筋肉が膨れ上がり、背丈が3メートル以上まで大きくなる。

そして目は白目をむき、表情はまさに悪魔。

髪が金色から黄緑に輝き、さっきに増して髪が逆立っている。

これが――サイヤ人最強にして君臨する彼の姿――

伝説の超サイヤ人

「な、なんなの……あの姿……」

慧音は驚愕する。もはや、動く事すらままならない程の驚愕に見舞われていた。

見た事もない姿――雰囲気が違う、別人のような――本当

に彼はブロリーなのかと思うくらいであった。

ブロリーはしばらくそのまま、恐ろしい形相だったが、ニヤリと笑う。

そしてもう一人の自分へ、人差し指を向けてこう言い放つ。

「まずお前から――血祭りにあげてやる！」

そしてブロリーは構えると――

言葉にも叫びにもならない声を上げ、バイオブロリーへと飛翔し突撃する。

ズドオオオオオッ！

彼の通った地面の後は、触れてもいないのに抉れ崩れる。

それほど、彼の気圧が大きいのだ。それは触れずとも被害が及ぶ。

「でええい！！！」

ズガアアアンッ！

彼の鉄拳が敵に衝突した瞬間、轟音が鳴り響いた。

バイオブロリーは吹き飛び、そのまま森の中へと吹き飛び、木々をなぎ倒しながら転がり倒れる。

「う、ウウウウヴァアアッ！！！！！」

バイオブロリーは怒り狂いながら態勢を立て直し、ブロリーを睨めつける。。

「そうこなくちゃ面白くない！」

そう叫ぶと、バイオブロリーの元まで飛翔していく。

「ヴァアアアアアッ！」

バイオブロリーは撃ち落とそうと、無数の気弾を放つが――

だが、その笑いは消えた。

「は、あああ……」

やがて、その表情がなくなり――髪、筋肉、背丈――全て
普段のブロリーへと戻っていく。

彼はある事を思い出す――

それは、バイオブロリーの死に様――

『グアアアアッ！カアアアアカロットオオオオオオオオオオオオオ
オオオッ！』

姿形は違えど、自分が死んだ時そのものの様に思えたのだ。

カカロット……ブロリーも死に際にそう叫んだ。

ブロリーはバイオブロリーが何処でカカロットの名を知ったのかは
実際に見たわけではないが――

あれは、自分の分身なのではないか――？

そう思い始めた。

――
スタ、スタ、スタ――

ブロリーは慧音と子供の元へと、戻ってくる。

さっきまでの悪魔のような姿だったのに――普段のブロリーに
戻っていた。

「ぶ、ブロリー……」

慧音は思わず名前を言ってしまふ。

言う言葉も思いつかないのに、話掛けてしまった。

と、そんな慧音を余所に子供達は――

「ブロリー先生！凄いや！カッコイイ！！」

などの歓声と共にブロリーに駆け寄った。

「・・・ふ・・・」

と少し笑う。

とまあ、こんなかんじで――寺子屋としての初日は終わりで
す・・・はい・・・

伝説 今ここに降臨（後書き）

ブロリー「フッフッフ、フッフッフハッハッハ！」

孫悟飯「あ、悪魔たん…」

パンツ「あんな奴を生かしておいたら…（ry。アハッ…!」

孫悟空「ドラゴンボールでいきけえるさあ（笑）」

ドロリー「ヴァァァァァァ（俺はまだ終わリーじゃないぞ）」

孫悟空「おめえちよつとしつけえぞww」

ベジータ「出しゃばるんじゃないや——ふおおお」キイイン、ドゴオ

オン

ブロリー「ドロリーをいじめるなYO。重要——おっと、口が滑ったなあ…」

最強の人造人間（前書き）

タコ 「コンピューターのはじき出したデータによりますと、ブ
ロリー様の出番はございましたんWWW」
ブロリー「何ィ！？主役は俺だロツトオオオオ！？」

最強の人造人間

あの世では――

昆虫のような部分をもった人型の人造人間――セルは呆然と立っていた。

そして彼の周りにはセルをデフォルメ化したような容姿で水色のちっちゃい子供――セルジュニア7体が無邪気に遊んでいた。

地獄では親子らしく暮らしているセル親子。

セル達は地獄に落ちてから大人しくなった。まあ、暴れば大人しくさせられるだけだが――

抗う事無駄だと感じたセルは、こうしてセルジュニア達と普通に暮らしている。

「暇な物だな。何か些細な事でもいいが――刺激が欲しいものだ」

と、そんな事を思いつつも地獄の赤い空を見上げていた――
が……

「……ッ!？」

何かを感じ取った。

と感じた瞬間、爆発音が耳に入る。

セルはその方向に目を向け、セルジュニア達も遊びを中断し、驚く。

（どこかで戦闘が起こっているな。丁度1キロ離れた所か）

そう感じ取る。その証拠として、そこでは煙が舞っている。

「セルジュニア、ついてこい！」

そう言うのと、子供達を引き連れそこまで行った

＊

ヒュウウ

セル達は例の場所まで来た。

戦いのせいか、煙で何がなんだかわからない。

「・・・気がない・・・どうやらいなくなってしまったようだ・・・
残念だ。暇つぶしに戦ってみたかったんだがな」

「ん？」

セルは煙の中に何か光るを見つける。

「・・・はあッ！」

セルは煙の方向に拳を放つ。

拳と煙は数十メートル離れているが

ヒュウウッ！

風圧で煙は一気に退けられる。

「・・・ん？」

何かある。まるで空間を切り裂いたような亀裂。

亀裂の中は七色に光っている。

「なんだこれは」

「なッ！！」

「ウキヤーツ！」「キーツ！」

セルと近くに居るセルジュニア達は過敏に反応した。

（な、なんだ・・・この気は・・・！恐ろしい気だ・・・！この亀裂を奥から・・・）

セルの表情が強張る。

「ふ、フッハッハッハ！おもしろい・・・おもしろいぞ！この私をここまで呻らせるとは・・・！」

セルはあちらから感じる気に恐怖も感じているが、どちらかと言うと好奇心の方が強い。

是非戦いたい。己を超えうる存在————実に興味がある。

（・・・ふ、私も地獄に来てから相当退屈していた。この気の強力さ、凶悪さからすれば、戦えば私は死ぬかもしれんが・・・死しても後悔はない！）

ニヤリと笑うセル。

「よし、セルジュニア。行くぞ」

「「「キー」」」

そう言い、地上に降り、亀裂まで歩いていく。

ギュピ、ギュピ————独特の足音が響く。

（強力な気と同時に、人間以上の気を感じるな。それと同時に人間

レベルの気・・・どうやら私達がいた世界とはまた違う場所のよう
だ)

と、そうこう考えているうちに亀裂までの距離が10メートル程に
なっていた。

「まあいい」

と呟くが――

「――ッ！」

セルの表情が険しくなる。
と同時に

ドオオオオオンッ！！

セルに気弾が直撃する。

「ウキヤーっ!？」

爆発が起こり、セルジュニア達は四方へ吹き飛ばされた
煙が舞うが――

「・・・・・・・・中々やるな」

煙の中からセルの渋くも滑らかな声が響く。
ポフッ

煙が四方に吹き飛ばされた。セルはその中に腕組をして立っていた。
セルはしばらく目を閉じていたが、目蓋を開ける。

そしてある方向を向いた。

その方向には――

ある集団がいた。全員で5人

皆、海賊のような衣装を身にまとっている。

「ほお、貴様等は数年前にこっちに来た、ボージャック一味とか言う奴だな？」

「ふん、知っていたのか。まあいい。どうやら、その亀裂の奥に行けば俺達は肉体を取り戻す事ができるようだな」

ボージャック一味――その中のリーダー格、ボージャックが言った

セルは険しい表情だったが、少しだけ笑む。

「恐らく、な。・・・もしかして、貴様等はあっちの世界に行き、その支配するのが目的か？」

「ああ、俺達も、少しばかり退屈だからな」

ハッ！

セルはボージャックに対し、馬鹿にするように笑う。

「下らんな。支配――実に下らん」

「・・・なにい？」

ボージャックは機嫌悪そうに答えるが、セルは構わず続ける。

「支配した後、お前達はどうするつもりだ？逆らう者はいない——
——そんな退屈な世界で気楽に生きるのか？馬鹿馬鹿しいな。それ
ではこの地獄にいるのと変わりはない。

一番楽しいのは、強い相手と戦う事——そして自分をも超え
うる存在に興味を抱き、挑戦し、倒す——それが一番の楽しみ
とは思わんのか？」

セル——かなりの自信家であり気分屋。好戦的で強い相手と
の戦闘を娯楽のように好む者だ。
彼は強い相手と戦う事が楽しいと感じる者

「・・・鬱陶しいな。頭にきた。あっちの世界に行く前に、お前を
倒すことにした」

ボージャックは半分怒り気味に、半分笑いながら言った。

「貴様程度では、この私には勝てんよ」

余裕気味のセル。

「「「ウキヤー、キーツ！」」」

セルジュニア達が騒ぎ始める。

「ん・・・そうか、お前達も戦いたいんだな？」

「キーツ！」

うむ・・・とセルは呻り、ボージャック一味を見た。

「ボージャックよ、お前の近くにいる部下達と私の息子達と戦わせたいのだが、良いかな？」

「良いぜ」

ボージャックはそう言った。

だがボージャックは気づいていなかった。セルも、セルジュニア達が自身と部下を上回っていると。

「そうか・・・では、貴様等から掛かって来い」

セルは指で挑発した。

「のぼせるなよ、すぐに殺してやる！」

ボージャックはセル目掛けて突っ込んでくる。が――

「遅いな」

セルはそれを華麗に避け、ボージャックの腹に蹴りを入れる。

「ッ――グハ！」

だがセルはさらに追い打ちをかけるかのように、肘で背を叩きつけ、地に叩きつけられる。

さらにセルは腹を蹴り飛ばし、ボージャックは数百メートル吹き飛ばされる。

セルはトータル3発、ボージャックに喰らわせた。その時間わずか1秒足らず。

「ぼ、ボージャック様！」

ボージャックの部下――ゴクアが叫んだ。
だが――

「ウツキヤー！」

バシユン！

セルジュニアが突っ込んでくる。

「クッ――！」

ゴクアはギリギリ避ける。

「何やってんのよ！よそ見してる暇が有ったら戦いなさい！」

ボージャックの部下の一人、ザンギヤがゴクアに叫ぶ。
現に彼女ももう一人のセルジュニアと交戦中であつた。

「チ――」

ゴクアは舌打ち交りにセルジュニアの元へ飛んでいく。

「その程度か？」

セルは挑発気味にいう。

「くそ、少し甘く見ていたみたいだな。今度は本気で行くぞ！グォ

オオオオオオオオオオオオ!

バシユウウンッ!

光が弾けた。そしてボージャックの姿が変わる。

上半身に身に着けていた服が弾け、青い肌が緑色に染まり、髪は赤くなる。

「これでお前は終わりだ・・・俺のフルパワーに勝てるかな？」

「ふ、雑魚め。思いあがるのは良いが、その自信、一瞬にして叩きのめしてやろう」

セルはそういうと

「ぶるあああああああああッッッッ!!」

バシユウウンッ!

セルから気が弾け飛んだ。

それと同時に彼の体中にスパークが弾ける。

それを見たボージャックは――

「なにッ!・・・あ、あの時の小僧と・・・同じ?」

「さあ、地獄の中でも最悪な地獄を見せてやろう・・・もう一度行ってみろお・・・俺に勝てるかなとなあ!」

「クッ!」

「この一撃で終わらせてやろう」

セルが一気に圧した。

「な、何い！——ガァァァァァァァァァァ！」

ボージャックにエネルギーが直撃、一気に吹っ飛ばされ——

そのまま何処かへいった。

ただ飛んで行っただけなのか、消滅したのかは定かではない。
だが、ここは魂だけの世界。死んだとしても再び蘇る。

「ふ……終わったか」

と呟きながら、セルジュニア達を見る。

セルジュニア達も敵を撃破したようだ。ボージャックの部下たちは
その場に倒れている。

「では、行くか——」

最強の人造人間（後書き）

作者でございます。

投票率が下がってきております。

学校で色々急がしいですじゃWWさっそく避難する準備だあー

ブロリー「何処に行くんだ？」

作者「おお、お前と一緒にい、小悪魔に会う準備だあ！」

ブロリー「悪魔は俺だロットオオオオオオオオオ！」

作者「自分の作品で殺されるとは——これも俺の定めか」
デデーン／＼ピチューン／

悪魔は色々と楽しいようです(前書き)

ブローリー「…友達が欲しいなあ…」

悪魔は色々楽しいようです

翌日

「・・・慧音、今日は手伝う事あるのかぁ・・・？」

「えっと、今日は体育はないから、手伝わなくて大丈夫だぞ」

「・・・そうか」

「あ、それとブロリー」

「・・・うん・・・？」

「昨日は助かったぞ」

「・・・お前・・・何回お礼を言うんだ？もう3回目だぞ」

と、こんな感じだ。

*

ブロリーは暇になったので、適当に歩いている。

「・・・うん？」

ブロリーは洞窟を発見した！

「・・・フッフッフッフ・・・ッ！」

何かを思いついたように笑い出す。

（・・・強い奴がいそうだな・・・）

理由は簡単だったようだ。単に戦いたいだけ。
ブロリーは洞窟へと入る

ある程度進むと

「...?」

女の子がいた。

耳が尖っており、髪は金髪に近く、目は緑色（サイヤ人かあ？

「もしかして、旧都にいくの？」

突然問いかけてくる。

「...はい・・・って、うん・・・？旧都ってなんだあ？」

「し、知らずに来たの？旧都は幻想郷の地下にある都よ」

（...地下？まさか前に来たあそこか？あの時は地面を破壊してきたが、本当の入り口はここだったのか？）

「とにかく、旧都にいくのかしら？」

「...ああ・・・それがどうした？」

「いや、人間がくるのは珍しいと思って」

「…俺は人間？違う、俺は悪魔だ…」

「もしかして馬鹿にしてる？…妬ましい」

「…ふん、俺が人間ではないのは紛れも無い事実だ…」

「…あれ？」

彼女は何かに気がついた様に言う。

「…凄く高い身長に…金色の首飾りとブレスレット、それにブーツ…上半身裸で——まさか」

「なんだあ？..」

「まさか貴方、旧都の妖怪達を弾幕勝負で連勝で負かした——」

「…なんで知ってるんだあ？」

「悪魔が来た！って皆大騒ぎしていたわ。悪魔ってそういう意味だったのね！高身長だし——カッコイイし…妬ましい」

「……妬ましいってなんだあ…？」

妬ましいの意味が解らないブロリー。

「うらやましいって嫉妬するって事よ」

「……お前、俺がうらやましいか……？フッフ」

「…え…？」

ブロリーはそれだけを言い、飛びながら洞窟を一直線に移動した――

＊

適当に歩いていたら――また来てしまった。これで2回目。
そう、旧都についた。

「……」

ブロリーは現在、町内を歩いているが――
なんだか、かなり注目されている気がする。これも前に暴れた結果
なのだろうか？

「……」

＊

ブロリーはかなりのスピードで旧都を駆け巡っていた。
そして今丁度、旧都から抜けた場所――旧地獄に居る訳だが――

「……なんだあ、あれは……」

何やら、西洋風の屋敷がある。
前に行った紅魔館とはまた違う雰囲気である。

「…」

ブロリーは面白半分に行ってみる事にする。

＊

門を飛び越し、扉を開けて内部へ――

「へああッ!？」

内装も西洋風で、黒と赤のタイルで出来た床や、ステンドグラスの天窓が特徴だ…

だが……

何やら大量の小動物達がいる。

その動物達はブロリーに寄ってたかって……

「……」

ブロリーはどうする事もできぬう!

昔のブロリーなら一気に吹き飛ばしたと思うが、それはブロリーの心の変化上の事でもあったりする。

「…ふ、はっはっはっは…」

無理矢理、笑って見せるブロリー。

だが、なんで笑ったのかも自分で解らない。

「……よし」

ブロリーはそう言うと――

ドオ：弱めの気合で動物達を死なない程度の軽く吹き飛ばした。

「逃げロツトオ：ッ！」

そう言う――黒と赤のタイルの床を走り出し、どんな施設かもわからない城内を駆け巡る。

ブロリーの足の速さに追い掛ける動物もついては行けなかった。

ズサァッ

ブロリーは動物達が追ってこない事を確認すると、立ち止まった。と、中庭のような場所に来ている。

その中心に、何やらまた洞窟が――
ブロリーは近づいてみる。

「……何だか……ここら辺だけ熱い気がするな……。入ってみようか……」

＊

洞窟を抜け――

「……溶岩かあ？」

何やら赤く煮えたぎった溶岩が所々にある。

特にブロリーが立っている崖の下。

空間一体がかなり熱い。だがブロリーにとってはどうってことない。何せ以前溶岩に突っ込んだ事がある。その最はすんなり生きて生還。恐ろしい。

「異物発見！」

「……うん……？」

女性の声がした。

丁度自分の斜め上から。

ブローリー体を動かさず首だけ動かした。

見てみるとまたしても女性。

胸部に赤い球体が埋め込まれ、裏地が宇宙の白いマントを纏っており女性にしては長身。

右足と右手に何か付けている。特に右手の方には多角柱状の物体でキャノン砲みたいだ。

何やら彼女はコチラのそのキャノン砲（仮）をコチラの向けているような……

「核融合炉の異物混入は一旦反応を停止し、即座の異物を排除せよ！」

「……」

取りあえずブローリーは身構えといった。

「核熱『ニュークリアフュージョン』！」

（スペルカードか……）

その瞬間、その女性を中心にいくつかの巨大な弾が発射され、それに次いで大量の小さい弾が放たれる。

「・・・ふん、可愛い技だな！」

バシウンッ！ブロリーの髪が金色に逆立ち目が緑色に光る。超サイヤ人となった。

その瞬間、溶岩で赤く照らされていた空間が緑色の眩い光に照らされる。

光がブロリーの右手に集まり

「トラップシューター！」

それを放つ。

その瞬間、その放たれたエネルギーは分裂し無数の光弾となった。
ドゴオオオッ

その光弾は相手の攻撃を1つ残らず打ち消す。

それを見た女性は驚いた。

「うにゅ？人間だと思ったけど・・・違う？」

「人間・・・と思っていたのか？」

そう返すと、ブロリーは再び右手にエネルギーを溜める。

「ブラスターシェ尔！」

ズキウウンッ！

大きく振りかぶり、光弾を思いつきり投げつけた。

「遮光「核熱バイザー」！」

相手の目の前に青いバリアーが展開される。
ブロリーの放ったブラスターシエルはバリアーに当たった後、消滅する。

「ほう・・・中々やるな。どうやら今のところ、俺が戦った相手の中ではお前が一番強いらしいな」

そうブロリーが褒める。

「え？ えへへ、ちょっと嬉しいかも」

喜んだ。だが――

「あれ？ 何してたんだっけ？」

「・・・・・・・・・・は？」

いきなりのボケだった。

「そこのお兄さん、何か知らないかな？ 私忘れっぽくて」

表情が本当に困っている。

どうやら本当に忘れたようだ・・・

「お前がいきなり俺に攻撃したんだろ？」

「・・・・あ！ と言えば核融合炉に異物混入したって知らせが来たんだった！ そして異物発見！ 急いで排除しないと！」

「・・・本気かあ？」

「うん！」

「じゃあ、俺も少しだけだが力を入れるとするか」

そう言うのと――

「エヘッアアアアアアアアアア！！」

ブロリーの目、口あらゆる所から閃光がまき散らされる。

そしてブロリーが炸裂する――

「うわあっ!?!？」

その衝撃は数十メートル離れた相手にも及んだ。

その場がブロリーから放たれる光に照らされる。

眩い光の中、ブロリーの姿が変わった。

身長は3メートルを軽く超しており、筋肉は膨れ上がっている。

髪は黄緑色に輝き、先ほど以上に逆立っている。目は白目を剥いている。

その姿はまさに恐ろしい悪魔。

「す、凄い・・・だけどこっちも仕事だから引き下がらないわ！」

そう言うのと、腕のキャノン（仮）をこちらの向ける。

「爆符『ギガフレア』！これでお終いだよ！」

そう叫ぶと、キャノン（仮）の砲塔から光が漏れはじめている。

「そっちは本気らしいようだが、その程度のパワーでこの俺を倒せ
ると思っているのか？」

ブロリーが喋りはじめた途端、空間が緑色の光に照らされる。

彼は左手を前に突き出す。左手に光が集まりブロリーは左手を閉じ
る――

「よし！チャージ完了！喰らええええ！」

女性の方はそう叫んだ。瞬間、砲塔から極太レーザーが放たれる。
如何にも強力。その反動で女性は少し後に下がった。

対してブロリーは――

「イエー！！」

左手を開き小さい野球ボール並みの緑の光弾を放つ――
一見小さいが――

相手のレーザーと衝突した瞬間、そのレーザーをも超える直径程ま
で巨大化した。

「ちょ、反則でしょ！」

相手は叫ぶ。

そして踏ん張ってレーザーにさらに力を込める。

その成果、彼女のレーザーが勝り、ブロリーの光弾が圧されるが――

「とっておきだぁ・・・!」

そう言うのと、左手を向ける――

その瞬間、左手からエネルギーが放出され、そのエネルギーは光弾へ――

ブロリーの光弾が圧す

「も、もう・・・無理かも!」

そう思い、相手は諦めたのか力を弱める。

そしてブロリー光弾が一直線に彼女へ向かってくる。

彼女は覚悟して目を閉じるが――

・・・・・・。

「うにゅ?」

なぁんにも起きません。

彼女は眼を開けてみると。

光弾は動きを停止している。

「ふん、とっておきの手加減ダァ! 確か弾幕ごっこは相手を殺してはいけぬう! ルールだったからな」

「ええ? そうだっけ?」

またボケる彼女、

「ふ、フツハツハツハツハ、ハツハツハツハツハツハツハ! ! ! ! !」

お前は中々面白いなあ・・・しかも強い」

ブロリーは褒めたたえた。

そして彼女の近寄る。

「所で私、何やってたんだっけ？」

「遊びだＹＯ」

「そうだっけ？それにしてもお兄さん、凄い身長だね！」

そう、現在のブロリーは伝説の超サイヤ人状態。
身長３メートル超しなど恐ろしいにも程がある。

「フッハッハ、カルシウムのパワーをいくら吸収したとて、この俺を超える事はできぬう！・・・カルシウムってなんだあ？」

「えっと・・・わかんない！」

王子「？な奴ら——ふおおッ！？」キイイイン、ドゴオオン（
本編とは関係ないＹＯ）

「「アッハハハハハ！」」

二人は笑い合った。

「所で・・・お前の名前はなんていうんだあ？」

「私？私は靈鳥路空だよ！」

「うん？・・・言にくいなあ・・・お空でいいか？」

「うん！あ、お兄さんは？」

「俺はブロリーだあ！・・・にしても、ここの溶岩は熱いのかあ？」

「うん、入っちゃったら人間は愚か妖怪まで死んじゃうよ」

ブロリーは少し黙るが、ニヤリと笑う。

「フッフッフッフ・・・！」

「どうしたの？」

「ちょっと泳ごう！」

ブロリーの言葉にお空はビックリ仰天。

「だ、ダメだよ！死んじゃうって！」

そんなお空の言葉は無視無視なブロリー。トランクス「アハッ！！」

「イエイ！」

おっとブロリー！崖から飛び降りてダイブ
ジャボオオオン！！
ブロリーは沈む。

.....

「ああああ！どうしよう！ブロリーが！」

慌てるお空だが

ジャバアア！ジャバジャバ！

「フツハツハツハツハ！」

ブロリーはなんて事なく泳いでいる。クロールだあ！

それを見たお空は・・・啞然呆然

「す、すごい・・・」

ザッバアアアンツ！

ブロリーは溶岩からあがり、元の場所へ戻る。

「お空もどうだあ？溶岩ブロです・・・はい・・・」

ブロリーがそう言った瞬間、ブロリーの姿が元に戻り始め、姿が普段の黒髪イケメンになる。

「あれ？戻っちゃった・・・でも身長高いね！カッコいい！」

「・・・はい・・・」

いきなり出会ってこの始末☆

二人はもうすっかり仲良しなのであった

王子「?のバーゲンセール——ふおおっ!・?」

悪魔は色々と楽しいようです（後書き）

ブロリー「友達ができたYO」

ベジータ「ふん、？な奴どうし、仲良く——ふおおおッ!？」キ
イイイン ドゴオオオン

ブロリー「いくら俺が？だとて、この俺に勝つ事はできぬう！解つ
たか？クズ」

ベジータ「グウウウ：俺がベジータだあ！ちやあああああ——
」キイイン ドゴオオン

ブロリー「ふん。仙豆をやろう！」

ベジータ「ダニィ!？」

パラガス「ゑゑゑ!？」

孫悟空「ベジータの奴WWWしょうがねえなWWW」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154w/>

ブロリーが幻想入リーです・・・はい

2011年12月18日23時51分発行